

平成22年度
喜多方市小学校農業科作文コンクール

作品集



喜多方市教育委員会

発刊に寄せて

喜多方市教育委員会教育長 菅井 一良

喜多方市小学校農業科も四年目を迎え、喜多方市の小学校三年生以上の子どもたち千百人近くが小学校農業科の学習に取り組みました。小学校農業科は子どもたちの「豊かな心」「社会性」「主体性」の育成を三つの柱として取り組んでいます。この作文コンクールは、それを検証する上でとても大切なものであると考えています。第二回目の今回は、九百三十八点の応募があり、該当する子どもたちの八十六%が応募し、驚くことに全員応募した学校が七校もありました。

現在、子どもたちの、規範意識や社会性の低下、思いやりのなさ等、様々なことが問題となっています。しかし、子どもたちの作文を読む限り、まったくそのようなことは感じられません。喜多方の豊かな自然の中で、支援員さんをはじめ地域の方々に支えられ、子どもたちは生き生きと作物を育て、多くの感動体験をしています。

また、現在学力の向上に欠かすことのできない「思考力」「判断力」等も着実に身に付けているように思っています。なぜトウモロコシの種は赤いのか、なぜ苗を植え付ける際に元肥が必要なのか、なぜふかふかに耕さ

れた畑が必要なのか、喜多方の子どもたちは作物の成長過程の中でしっかりと理解するようになります。実はこの一つ一つの疑問をその時だけの疑問に終わらせることなく、作物の成長という長い追究過程を通して解決していくという体験が、学力の向上にとってはとても大切なことなのです。

おわりに、喜多方市の子どもたちのさらなる成長を心より期待するとともに、その子どもたちを温かく優しく見守っていただいている保護者や農業科支援員、地域の皆様に深く感謝申し上げます、今後とも子どもたちの健全な成長のためにご支援ご協力くださいますようお願い申し上げます、発刊の言葉といたします。

いのちと知性、協同性を育む「農業科」

喜多方市小学校農業科作文コンクール作品集に寄せて

宮城学院女子大学教授 佐藤 幸也



「小学校農業科」は全国に反響を巻き起こしています。そして、現代日本社会における本実践の教育的価値、重要性はこの「作品集」からも理解することができます。

子ども達の綴った作文には農業を体験し学習する喜び、成長する姿が溢れているからです。四年間体験してきた子どもたちは、家族、喜多方地域、農業などに対する傍観者ないしはお客様から、「学び生きる主体」へと変容するだけではなく、歴史的に人間がたくさんの生き物から命をいただきながら、それらを仲間とともに育て、困難を乗り越え協力してよりよい社会の在り方を目指してきたのだ、ということを経験しています。また、そこから命の大切さや温かさに気づき、「無縁社会」（自殺、殺人など）の中で苦しむ人々に対して「農業（科）」をやってみませんか」と呼びかける他、地球温暖化などにも触れて「生きとし生けるもの」を大切に知る知性も示しています。名古屋で開催された二〇一〇年「生物多様性条」の国際会議（「コッブ一〇」）で議論された精神とほぼ重なります。家族や地域の人々の幸福を願い（いのち）と関わる学習体験の積み上げが、こうしたやさしく暖かい愛情と科学的精神の融合を子どもたちの中に生み出したのではないでしょう。

うか。喜多方の方々の子どもを見つめるまなざし、農家や先生方、行政など連携が結実したものと考えます。かつて香川豊彦は『乳と蜜の流れる郷』（ノーベル文学賞候補数度）の舞台を喜多方としましたが、そのヒューマニズムが脈々と流れていると理解されます。

それぞれの学校では様々な困難を控えながらも支援員の献身的な協力と子どもたちの意欲に支えられ、この学習を充実させてきたことが作文に溢れています。しかも、作文力（学力）が年々高まっているのがわかります。これは「農業科」を通じて思考力、具体的には観察力、分析力、検証力とそれらを総合する力などが、自分たちの生活への考察や農業労働に関する多くの技能や知識とともに高められてきたからでしょう。

子どもたちは農業を大変難しいと言いながら、だから「楽しい」と記しています。これはソクラテスや林竹二先生が難しいけど（から）楽しいと解説した「学び」（学習）の本質を表しています。「フィロソフィア」（愛知）ということです。その上で、祖父母や農業に携わる人々の厳しい労働に「共感」（ルソーの「シンパシー」）、家族一緒に調理し食卓を囲む団らん、「みんなが笑顔」になれる「農業が好き」、「農業は大切」、「将来も農業をやりたい」と語っています。ここには、経済、もうけ主義一辺倒の社会的趨勢に対する人間らしい暮らし、生き方を願う協同性の知性や品格を見ることができます。善なる魂とも言えるでしょう。収穫物や赤飯をお年寄りたちに届け、この喜多方の大地、文化を守ってきてくださった人々に感謝と敬意を表し、自分たちも受け継いでいきますと語る子どもたちの気高さは、イザベラ・バードが感嘆した日本人、会津の精神そのものです。

他者より一点でも高い点数を取り蹴落とす競争の学習ではなく、弱さと困難さを助け合い協力し合いながら克服し、笑顔あふれる社会にしたい、そういう人間でありたいと「学ぶ」農業科に見る本当の教育力、人間形成力が示されています。

三年、四年と進むにつれて文章が論理的になり、五、六年生は自然科学と社会科学双方の視点が深まってきます。サイエンス（学問の体系）と暮らし、労働を見事に融合した学習として子どもたちが受け止めているのです。この「農業科を全国、世界に広めたい」という子どもの作文は、喜多方市農業科の到達点を示して余りある宝物と言えるでしょう。

発刊に寄せて

喜多方市教育委員会教育長 菅井 一良

寄稿

いのちと知性、協同性を育む「農業科」

喜多方市小学校農業科作文コンクール作品集に寄せて

宮城学院女子大学 教授 佐藤 幸也

目次

入賞作品

【最優秀賞】

まちにまったイチゴのしゅうかく

熱塩小学校 三年 伊野 颯太

野菜作りで学んだこと

加納小学校 四年 長谷川 理子

協力と笑顔で農業を

松山小学校 五年 佐藤 舞雪

農業科の楽しさ、命の大切さ

熱塩小学校 六年 猪俣誌央里

【優秀賞】

育てたじやがいも

松山小学校 三年 佐瀬 日和

植物の命にふれて

高郷小学校 四年 唐橋七菜子

農業科の勉強をして学んだこと

加納小学校 五年 横田 真子

じいちゃん、わかばあちゃん、ありがとう

上三宮小学校 六年 高橋 舞

自まんの農業科

熱塩小学校 六年 小林 未来

【佳作】

豆の成長

松山小学校 三年 佐藤晃太郎

野さいを育てる大へんさ

松山小学校 三年 増田 篤実

野さい作りをやって

加納小学校 三年 長井穂乃実

小豆の栄養について

松山小学校 四年 高橋 凜

おいしい野菜やくだものありがとう

関柴小学校 四年 萩原 結菜

農業って楽しい

慶徳小学校 四年 中條 美奈

笑顔の赤飯配り

熱塩小学校 五年 熊久保 粋

お年寄りに配る赤飯

熱塩小学校 五年 小林 明夏

食べ物の大切さを学んで

高郷小学校 五年 唐橋 凜

農業科を学習して

熊倉小学校 六年 磯部 実悠

協力することの大切さ

堂島小学校 六年 富田 夏芽

【第一次審査会通過作品】

大豆の育て方

松山小学校 三年 川口 遼香

おいしいじゃがいも作り
大変ないね育て

関柴小学校 四年 赤城菜々香

田植えや稲刈りをした時のこと

上三宮小学校 三年 川勝 俊

暑さをのりきった野菜達

関柴小学校 四年 小田切翔希

はじめての農業科

熊倉小学校 三年 齋藤 響子

わたしのそだてたやさい

関柴小学校 四年 東條 純夏

じゃがいもほり

熊倉小学校 三年 佐藤 楓子

農業の勉強をして

熊倉小学校 四年 川瀬 理奈

つるをのばすカボチャ

豊川小学校 三年 大江 純

農業科で学んだこと

豊川小学校 四年 松崎 雪奈

カボチャとスイカ

豊川小学校 三年 古川 結葉

白菜を育ててみて

慶徳小学校 四年 大竹 優太

みんなで作るえ顔

熱塩小学校 三年 遠藤 伶菜

農業の感動

慶徳小学校 四年 佐藤 祐斗

とうもろこし

堂島小学校 三年 鈴木 光

大豆を育てて

加納小学校 四年 宇内 真愛

いろいろなやさい

姥堂小学校 三年 大塚 天音

働くことの大変さ

山都小学校 四年 岩橋 妃奈

しゅうかくしたおいしいすいか

駒形小学校 三年 大堀 瑞希

米作りに挑戦して

豊川小学校 五年 風間 彩花

育つ

山都小学校 三年 齋藤 颯人

初めての米づくり

豊川小学校 五年 齋藤 優奈

さつまいもを育てて、食べたよ

山都小学校 三年 竹田 琉莉

農家の人の大変さ

豊川小学校 五年 佐々木優夏

かぼちやを育ててみて

松山小学校 四年 福島 諒華

豊川小学校 五年 上林 絹

一年目の農業体験

いつまでも農業を：

野菜の気持ち

おいしくて楽しい収穫祭

笑顔の赤飯配り

大切な農業

手作業の力

農業の楽しさ

はじめての田植え体験

農業でがんばったこと

初めての田植え

初めての米作り

里芋ができるまで

豊川小学校	五年	山田	起熙
慶徳小学校	五年	加藤	伶
慶徳小学校	五年	佐藤	涼
熱塩小学校	五年	上野奈津美	
熱塩小学校	五年	檜澤	翔太
加納小学校	五年	長谷川	望
駒形小学校	五年	猪俣	雪乃
駒形小学校	五年	永澤	明
駒形小学校	五年	渡部	茉由
山都小学校	五年	田中	ひな
高郷小学校	五年	貝沼	佳恋
高郷小学校	五年	斎藤	優佳
松山小学校	六年	猪瀬	愛未

農業科の大切さ

田おこしの昔と今

昔の人の苦勞と工夫

新しい発見いっぱい

お米の大切さ

野菜ってすごい！

農業科の思い出

ジャガイモを育てて

講評

編集後記

上三宮小学校	六年	遠藤	美憂
入田付小学校	六年	佐藤	和佳
入田付小学校	六年	渡部	裕樹
関柴小学校	六年	葛岡	沙織
豊川小学校	六年	東條萌々花	
熱塩小学校	六年	鈴木	莉乃
姥堂小学校	六年	管家	拓巳
山都小学校	六年	菊地	歩美

喜多方市小学校農業科
作文コンクール作品

【最優秀賞】

個人情報保護の
ため児童の写真
は削除してあり
ます。

まちにまつたイチゴのしゅうかく

熱塩小学校 三年 伊野 颯太

ぼくたち三年生は、きよ年の秋、いちごのなえを植えました。なえはまだ小さくて細くて、花も実もついていませんでした。ぼくはいちごが大好きです。心の中で、

「早く食べたいな。楽しみだな。」

と思いながら、植えたことをおぼえています。

それから冬が来て、雪がつもって、ぼくたちの畑の近くでもスキーをやって、すっかりいちごのことをわすれていました。

冬がすぎ、春が来て、ぼくたちは三年生になりました。雪がとけてしばらくして、畑に行って、いちごを見た時、「やったー。」

と思わず言いました。いちごは葉の色はきみどりで、うらはざらざらしていました。雪の下でいちごは、しっかり生

きていたんだなあと思ってうれしくなりました。

クラスのみんなで、いちごの本を読みました。いちごの力はすごいと思いました。つるをのぼしたり、寒くてきびしい冬をこしたりするところが、すごいです。ぼくはくわしく知らなかったもので、いちごのすごさがわかって、自分でこれからせわをしたいと強く思いました。

いちご畑に行って、なえのそばに生えているざつ草をむしりました。朝や帰る時、いちごが大じょうぶかなあとおもって、畑に見に行きました。そして、白い花がさきました。白い花をさかせるんだなあとびっくりしました。花びらは白で、中は黄色です。いがいときれいで、かざる花みたいだと思いました。

花のあとに、小さなきみどりの実がなりました。それが大きくなって、赤くそまつた実になりました。売っている実より、赤色がこくておいしそうです。クラスが食べないように、うすピンクの糸でイチゴの畑をかこんでまもりました。いちごを生で食べたとき、甘ずっぱくておいしかったです。クラスのみんなでイチゴジャムを作ってみて、生のイチゴと同じおいしさでした。おいしかったです。

個人情報保護の
ため児童の写真
は削除してあり
ます。

野菜作りで学んだこと

加納小学校 四年 長谷川 理子

私たちは、今年で二年目の農業科です。三年生の時のけいけんを生かして野菜作りに取り組んでいます。

わたしは今年、特に大変だったことが二つあります。一つ目は、くわの使い方です。三年生の時はほとんど使っていなかったくわも、四年生になるとたくさん使用しました。指どうしてくださる先生に教えてもらいましたが、なれなないのでなかなか覚えられませんでした。でもがんばって白菜の根元に土をかけました。そうすることで、雨で根がくさったり、ざっ草が生えるのをふせいだりするからです。ずっと中ごしで、重いくわを持つての作業は、そうぞう以上に変でした。

二つ目は、青虫取りです。わたしは虫が苦手です。でも農薬を使わない安全な白菜にはたくさん青虫がつかます。わたしは、
「いやだな。」

と思いました。白菜をりっぱに育てたかったので、葉の中までよく見て、青虫を一ぴき一ぴき取りました。

わたしの祖母は、野菜を育てているので、白菜もあたりまえのように食べていました。でも、大きくておいしい白菜を作るには、大変な手間とたくさん愛情が注がれているのだと気づきました。

今、わたしたちの白菜は、葉が丸まり始めています。みんなが一生けん命育てたので、きつととてもおいしい白菜になると思います。しゅうかくは、十一月の中ごろの予定です。

昨年は、白菜でキムチを作りました。今年は、何を作るのが楽しみです。

わたしは、農業科を通して野菜作りの大変さをけいけんしました。そしてもう一つ、野菜には作り手の思いがこめられていることを知りました。

来年はいよいよお米作りにちょうせんします。しゅうかくしたもち米は、全校生や地いきのみなさんに食べてもらうので、おいしいお米が作れるようにがんばりたいです。

個人情報保護の
ため児童の写真
は削除してあり
ます。

協力と笑顔で農業を

松山小学校 五年 佐藤 舞雪

「農業科って何やるの？めんどうそうだよ。」

そんな言葉から始まった私たちの農業科。このころの私たちは三年生。初めての農業科にめんどう、大変という思いがありました。

でも、二年後の私たち、農業科を笑顔でやっています。何があつたのでしょうか。

「手、真っ黒になっちゃったー。」

と毎回言う私たち。なのになぜ笑顔になったのでしょうか。それは、協力にありました。

農業科は、学年とボランティアの人との協力が必要な活動です。協力しなければ、笑顔になれないし、場合によってはけんかになってしまうこともあります。

「この三人でいも掘らない？」

「いいよ。いっぱい掘れるといいね。」

こんなささいなことが笑顔に変わるので。ボランティア

の人とも話し、みんなで協力しました。

「わあ。こんなにしゅうかくしたんだ。やったー。つかれたけどやってよかった。」

と、終わった時、聞こえました。私もなんだか楽しくなってきました。

「農業科って思ったより楽しいかも。」

私は思いました。みんなの気持ちが一つになったのです。それから、私たちは、大変でもがんばって農業科をやっています。新しい野菜や植物を育てるたびに、笑顔が増えるように感じます。

「自分のためになるな。」

と言えるようになるには、協力が大切だったのです。

みんなが協力しないとできないこともできたのです。

これからも農業科を楽しめるように、「めんどう」「大変」が、

「農業科っていいな」

に変わるように。私たちの笑顔が増えるように。

「農業科、大好き。」

個人情報保護の
ため児童の写真
は削除してあり
ます。

農業科の楽しさ、命の大切さ

熱塩小学校 六年 猪俣 誌央里

農業科の学習をはじめて、四年がたちました。今の私は、農業科に対する思いや考え方が農業科を始める前の考え方とぜんぜんちがっています。前まで、農業なんて別に好きではありませんでした。手がよごれるし、あせはかくしと、いやなことばかりかと思っていました。しかし、今の私はなぜだか、農業科に対する考え方が変わっていました。

農業科支援員の小林芳正さんに、一つ一つていねいに農業の楽しさなどを教えていただきました。特に、米や稲についてです。

「米はだれが作ってるの。」

と、芳正さんは言います。すると、最初のころはみんな

「私達が、がんばって育てている。」

と、考えていました。

しかし芳正さんは

「米を作っているのは稲。その成長を私たちが手伝ってい

る。」

と答えました。私は、たしかに私たちだけでは、稲は作れない。私たちが、一生けんめい稲の成長を手伝わなければいけない。植物も稲だって、人や動物のように生きている。その命を私たちがいたでいています。私の農業科に対する考え方はこのように変わっていききました。今まで、農業科に対する思いは、手がよごれる、あせをかくなど、いやな考え方だったけど、手がよごれるほどがんばった、あせをかくほど働いた、そのくらい、一生けんめいがんばって作物を育てているという証でもあります。そう考えると、農業科に対する思いは、だんだんと良くなっていききました。

私たちは、毎日、作物の命をいたでいて生きている。一生けんめい作物を育てて生きている。人と人が助け合い協力して、いろいろなことをのりこえていく、その楽しさが分かってきました。作物の命をいたでくことで私達は生かされています。今、農業をする人がへっているのです、これから命の大切さなどを、たくさんの人に教えていきます。

【優 秀 賞】

育てたじやがいも

松山小学校 三年 佐瀬 日和

「じやがいもを植えます。」

と先生が言いました。今日は、じやがいもを植える日です。じやがいも植えは、まず、半分に切ったじやがいもにはいをつけた物を用意します。次に、それを土の上におきます。そして、さいごに土をそとかぶせます。これでじやがいも植えは、終わりです。

わたしは、半分に切ったじやがいもにはいをつけた物で、本当にじやがいもがいっぱい育つのかなあと思いました。でも、めが出て、葉がふえて、くきがのびて、ぐんぐん育っていきました。すごいなあと思いました。

じやがいも植えの次は、草むしりをしました。草がぬけなかったり、しりもちをついたりしたいへんだったけれど、草むしりが終わった後は、畑がきれいになったので、とてもうれしかったです。くろうしたかいがあったなあと思いました。

草をむしった後は、土よせです。じやがいもがおれないように土をよせてあげました。

じやがいもが育ったので、しゅうかくしました。じやがいもは、大きいじやがいもや小さいじやがいも、へんな形

のじやがいもがごろごろでできました。本当にあんな半分のじやがいもから、いっぱいのだんごがなるなんて、びっくりしました。育てるのに、くろうしたけど、その後は、やってよかったなあ、くろうしてよかったなあと思いました。

わたしの家では、おじいちゃんとおばあちゃんが植物ややさいを育てているので、くろうしていると思うので、お手つだいをすんでやりたいと思います。そうすると、やさいがさらにおいしくなると思うし、お手つだいをするとほめられると思います。

わたしは、のうかの人たちがいるからこそ、生きられることを知りました。のうかの人たちはくろうしながらも、みんなのためにやさいや植物などを育ててくれます。のうかの人たちのことをもつというるべんきようしたいです。

植物の命にふれて

高郷小学校 四年 唐橋 七菜子

わたしは、植物を育てるのが好きです。なぜかというとしようらいお花屋さんになりたいからです。お花を助けたりお花をふやしたりして、みんなにもっとお花を好きになってほしい。やさいもみんなに好きになってほしい。

「もしお花ややさいとしやべれたらいいなあ。」

と思います。

植物の命は、すぐなくなってしまう。ふみつけてしまおうと、すぐかれて命を落とします。やさいも虫や人間に食べられてしまおうと命を落とします。でも植物や野菜は、人間に命をわたし人間がまた、花や植物を作りまたそれを食べ花やさいは、仲間をふやしていきます。人間もです。人から人が生まれまた人が生まれる。みんな同じです。一人の人に命がたくさんあるわけでもないのに一人の人間からまた人がどんどんふえていきます。

植物はうれしいんだと思います。ふえてへってふえてへってのくりかえしが多くの命を育てます。

母は、命にふれて、また命にふれて人間は多くの命をつくります。やさいも植物も地球上に一輪や一本しかないなんてありえません。でもいつか植物やさいたちにも終わりがくるのです。でもその終わりは、悲しい終わりでは、けっしてないのです。植物たちには、うれしい終わりです。かれても、ひりようになるということです。ひりようになるのは、いいことです。また、たくさん命をつくるんですから。

農業科の勉強をして学んだこと

加納小学校 五年 横田 真子

今年は、初めて、六年生といっしょに米づくりに取り組んできました。

去年も、少しは米づくりに参加したけど、今年は、種まきやかかしづくりなどもやりました。米づくりに参加して、たくさんのかことを学びました。

一つ目は、お米をつくるには、みんなで協力して、心をこめて、一生けん命つくらなくては、おいしいお米にならないということです。わたしたちも、お父さんとお母さんが協力して、

「元気に育ってね。」

と心をこめて育ててもらっています。一生けん命、愛情をこめて育てるということは、お米も子どもも共通点があると思いました。

二つ目は、米づくりには、人の気持ちが伝わるといこととです。作る人のやさしい気持ちが伝わると、おいしいお米になると思います。

わたしは、米作りが大好きで、いつも楽しく活動しました。でも、米づくりが好きでないとって、ふざけてつくってしまうと、お米にもその気持ちが伝わって、じょうぶに育たないと思いました。

わたしの家では、お米をつくっていません。だから、学

校で、米づくりに参加するということは、大切な勉強になったと思います。しょう来、家でお米をつくるのか分からないので、お米づくりは、大切な勉強です。

わたしたちは、社会で米づくりの学習をしました。お米づくりは、とてもたいへんな作業で、毎年お米をつくっている人は、たくさん努力を重ねて、お米づくりへの工夫を考えていることが分かりました。わたしは、お米をつくっている人に感謝して、お米を食べたいと思います。

来年も、下級生や、お家の人に、おいしいおもちをつくって、いっしょに食べられるように、がんばりたいです。

じいちゃん、わかばあちゃん、ありがとう

上三宮小学校 六年 高橋 舞

いつも農業をがんばっている、じいちゃんとわかばあちゃんへ。

上三宮小学校で農業科を始めて三年です。家でも農業をやっているけれど、ほとんど手伝ったりしない私は、三年やっていても、ぜんぜん仕事に慣れません。農業科を始めると言われた時も、正直

「えーいやだなあ。つかれるし、よごれるし、大変そう。」と、前向きな感想ではありませんでした。

いざ、農業科が始まってみても、やはり仕事は大変です。田植え、稲刈り、だっこく、なにをやるにも私の作業はぎ

こちなく、すぐに腰が痛くなりました。

「はあーつかれた。まだおわんないのかな。」なんてことばかり言っていました。

そんな大変な作業の中、私は強く感じるものがありました。それは、いつも家で米づくりや野菜づくりをがんばっておいしいお米や野菜をつくってくれている、じいちゃん、わかばあちゃんたちへの感謝です。じいちゃんたちは、暑い日でも寒い日でも、毎日のように田畑へ行って農業をしていました。米づくりのシーズンは、特に田んぼの水の調整や草むしりなど、毎日大変そうでした。でも、そのおかげで、私は毎日おいしいお米や野菜を食べられています。この農業科を通して、そのありがたみを、あらためて感じる事ができました。毎日おいしいお米や野菜が食べられるありがたみ、作っている人の苦労を実感できて、今まで以上にじいちゃんとわかばあちゃんに感謝しました。そして、その苦労があるから、私の家のお米や野菜はあんなにおいしいんだなあと思いました。

いつもおいしいお米や野菜を作ってくれている、じいちゃん、わかばあちゃん、今まで本当にありがとう。農業の手伝いは上手にできないけれど、いつでもたのんでね。私は、じいちゃんとわかばあちゃんの作る、愛情たっぷりのお米や野菜が一番大好きです。

自まんの農業科

熱塩小学校 六年 小林 未来

農業科は私にとって命の授業なのです。作物だけでなく生き物の命の大切さを、もつと深く教えてくれました。農業科は、心をいやしてくる、いや温かくしてくれる熱塩小学校の元気の源なのです。私がこう思うのは、たくさんのことを教えてもらったからです。大きく分けて「協力の大切さ」と「命の大切さ」を学ぶことができました。

協力の大切さは、農業科の原点だと思います。友達や地域みなさん、そして先生方、たくさんの方が私達全校生に協力してくれました。私はみなさんに「ありがとう」の感謝の気持ちでいっぱいです。私のクラス、六年生全員は、最高学年として、一生けん命取り組みました。私達がくじけずに取り組んでこられたのはたくさんの方の協力のおかげだと思います。支援員の小林芳正さんと管井さんが必ず声をかけながら教えてくれること、友達の「手伝うよ、大丈夫。」などの声、先生方や地域の方みなさんのやさしい心の支えがあるからなのです。

命の大切さは、農業科が一番伝えたいことだと思います。気にとめなかった殺人や自殺のニュースが、今は目にとびこんできます。

「どうしてそんなふうにな人を傷つけるの。人の気持ちを考えたことがあるのかな。」

と思います。農業科のおかげで今は「生んでくれてありがとう。」

と親に感謝の気持ちでいっぱいです。作物にも命があります。だから好ききらいをなくして、土地と作物に感謝しなくてはいけないと思います。人の命と作物の命は同じだと、私は考えます。

「協力の大切さ」「命の大切さ」この世の中には、このことを知らない人もいるかもしれません。私はこれから、このことをたくさんの方に伝えていきたいです。そしてこれからも協力することと作物と人の命を大切にして、大人になっても忘れません。一生の宝物です。

【佳 作】

豆の成長

松山小学校 三年 佐藤 晃太郎

ぼくは、大豆の成長のしかたがよく分かりました。まず、六月にたねをまきます。その時に、くわでうねを作ったねを入れます。

次に、くわで三センチ位に土をかぶせておきます。

これでたねまきは終わりです。その後一週間位すぎると、芽が出てきます。その芽は、豆が土にひっぱられているようにして芽が少しずつ土から出てきます。そして、二週間たつと、五センチ位のびて葉が出てきます。二十センチ位になると土をよせて、豆がたおれないようにします。七月中旬に草むしりをし、四ヶ月後からになった豆のえだをひっぱってほりおこし、一りん車につんで学校のプールの中、さかさにしてかんそうさせています。

でも、なぜ根を上にしてほすのかというと、かんそうしている時に、豆がはじめて遠くに行かないようにするためだと、じいちゃんに教えてもらいました。

豆は、とうふ、なつとう、しょう油、きなこ、みそ、もやし、えだ豆、いり豆、に豆などまだまだ数えきれないほどあります。その中で、ぼくが一番好きな食べ物は、きなこです。きなこは、大豆をいって、こなにひいた物で、も

ちなどにつけて食べるとおいしいです。

豆はそのまま食べると、かたいし、消化もあまりよくありません。だから、ナットウキンやコウジカビ、ニガリをくわえ、いろいろに加工されて、食べやすくおいしくしています。

農業をしなければ、野菜やくだ物、お米などがとれなくなり困ってしまいます。新せんで、おいしく食べるには、自分で畑や田んぼを作ってやるのが、大切だと分かりました。

来年も、いろいろな野菜などを育てたいです。

野さいを育てる大へんさ

松山小学校 三年 増田 篤実

私の家には、小さな畑があります。その畑は、ばあちゃんのため物です。私はその畑によく遊びに行きます。遊びに行くと、いろいろな事を教えてくれます。私が、「なんで二つのしゅるいのひりょうをまくの。」

と聞いたら、

「いつもごはんの時に、おみそしるとごはんとおかずを食べるでしょ。だから野さいも、一つのえいようじやたらないんだよ。」

と教えてくれました。私はなるほどと思いました。

でも私は、何が食べたいか言えるけど、話すことのでき

ない野さいに、人間が考えてひりようをやらないといけないので、むずかしいなと思いました。

学校でもそうでした。とうふ豆にひりようをまくとき、畑の先生が、

「一部分にだけひりようをやってもいけないし、少なすぎてもだめなので気をつけてやって下さい。」

と言っていました。かげんは大切だなと思いました。

しゅうかくの時も、

「あんまり強く引くと大豆か落ちちゃうし、弱すぎるとぬけません。」

と、先生が言っていて大へんだなと思いました。

家の畑では、もう来年のために、たねを用意していると
言っていました。これから冬になるのに、たねをまいたり
して、だいじょうぶなのかなあと心配になりました。きつ
とこうやって、ばあちゃんが生懸命育てているから、お
いしい野さいができるんだと思います。野さいを育てるの
は、見ているより大へんだと思いました。

私には、まだピーマンやなすとか、にがてな野さいがい
くつかありますが、大切に育てられた野さいなので、のこ
さないで食べたいと思います。がんばっていききたいと思
います。また畑に行きたいと思います。

小豆の栄養について

松山小学校 四年 高橋 凜

今年の四年生は、農業科でかぼちゃと小豆を育てました。
かぼちゃは、九月にたく山しゅうかくできました。

小豆は、十一月にしゅうかくしましたが、天こうが良く
なかったため、あまり実りませんでした。

わたしは、小豆を使った料理の中で赤飯が大好きです。
赤飯の中に入っている小豆は、ホクホクしてとてもおいし
いです。赤飯の色が小豆で赤くなることが不思議です。

そこで、小豆の栄養について調べることにしました。

小豆の中には、ポリフェノールという成分がたく山ふく
まれている、生活習かん病やろう化防止になるそうです。
ただし、ポリフェノールは水にとけやすいので、小豆をに
た時にその多くは汁にとけ出してしまいます。そこで、
この成分を十分にとるためには、に汁も残さずに使うお汁
粉や赤飯が一番良い料理だということがわかりました。

わたしは、自分の大きな赤飯にこんなにすごい栄養が
あることを知ってうれしくなりました。

また、とても低カロリーな食材で、こしあんのカロリー
はショートケーキの半分以下だそうです。和菓子の原料と
して多く使われる小豆は、体に良い食べ物だとわかりまし
た。

日本では、特に北海道の十勝でさいばいされた品種の小

豆が高い栄養があるそうです。

わたしたちが育てたかぼちゃと小豆は、総合学習のじゅ業で作る冬じかぼちゃの材料になります。栄養たっぷりの冬じかぼちゃを自分たちで作って食べるのが、今からとても楽しみです。

おいしい野菜やくだものありがとう

関柴小学校 四年 萩原 結菜

私のおばあちゃんのお姉さんは、野菜やくだものを作っています。野菜やくだものができると、たくさんとどけてくれたり、わざわざ家まで来てくれたりします。その野菜やくだものは、とってもおいしいです。その野菜やくだものを、みんなでおいしく食べている笑顔は、たくさんかやいているように見えます。

とくにおいしいのが、夏にできるももとスイカです。ももは、あまくておいしいです。スイカは、毎年、毎年、中を切ってみると真赤つかです。そこを食べると、ほっぺがおちるほどおいしいです。

野菜でとくにおいしいのが、キャベツやナスや、トマトです。キャベツは、すごくてつかいです。それを料理すると、とってもおいしくできあがります。ナスは、私の大好き物のナスづけにして食べると、すごくおいしいです。トマトは、毎年、実がでつかくて、真っ赤っかになります。ト

マトのハウスを見てみると、真っ赤っかになってるトマトがたくさんなっています。

おばあちゃんのお姉さんの育てる野菜やくだものは、家族の宝物になるくらいのものです。学校で農業科の体験をして、この野菜やくだものをつくるのが、どれだけ大変かが分かりました。これからも、野菜やくだものを、そまっにしたり、食べなかつたりしたら、野菜やくだものを作っている人の顔を思い出したいと思いました。だから、これから、好ききらいなく、残さないで食べたいと思いました。おばあちゃんのお姉さんには、ずっと、ずっと、野菜やくだものをたくさん数えきれないほどつくって、私たちが家族の笑顔をふやしていつてほしいと思います。私もしょう来は、人の笑顔をふやしていく農業をめざして、農業をやりたいと思いました。

農業って楽しい

慶徳小学校 四年 中條 美奈

私の学校では、今年も農業科の学習をしました。全校生で、いろいろな作物を作りました。米作りをはじめ、さつまいもやおもちやかぼちゃ人参、白菜、じゃがいも、大根など種まきからしゅうかくまで、全校生で、がんばって育てました。

私たち四年生は、三年生といっしょにじゃがいも、人参、

白菜を育てました。とくに楽しかったのは、人参のさいばいでした。畑にちよくせつ種をまきました。人参の種は、うすつぺらでくしゃみをしたら飛んでいきそうで、息を止めながら作業をしました。人参は、間引と草むしりをしたていどで、あまり手を加えなくてもひとりで大きく育ってくれました。私たちが、勉強をしている間に農業支えん員の方々が、めんどろをみてくれていたおかげで、りっぱな人参に育ちました。

人参のしゅうかくのときがおもしろかったです。ふさふさに伸びた葉を束にして二、三度、キュッキュツと左右にふりゆるんだ所で真つすぐ上に引きあげたとき、気持ちいいほど、スポツとぬけました。おもしろくてたくさんぬきました。

うすつぺらな種から土の中で成長しながら、いつも食べている形になるなんてビックリでした。

野菜を食べられるのはあたりまえだと思っていたけど、食たくにあがるまでには、とても時間がかかるということもわかったし、農家の人たちはいっしょうけんめいあいじょうをこめながら育てているということもわかりました。食べるときは、作ってくれた人たちにかんしゃしながら食べたいと思いました。農業科の勉強は、とっても楽しいと思えました。

笑顔の赤飯配り

熱塩小学校 五年 熊久保 粹

私たちの学校では、お年寄りの皆さんに、元氣と笑顔をあげる「笑顔の赤飯配り」という授業があります。私たちが育てたもち米と小豆で赤飯を作って、箱につめて渡しました。

赤飯を渡すとお年寄りの皆さんは、とても喜んでくれました。私たちが笑顔や元氣をあげに行ったのに、逆にもらったような気がします。とても心があたたかくなりました。

「ありがとうございます。」

「あら、まだあつたかいねえ。」

「おいしそうだねえ。」

などと言って、とても笑顔で喜んでくれました。私も

「食べてください。おいしいですよ。」

と言いました。そうするとすごく感謝してくれました。

やっていくうちに、最初はうまく渡せるかな、喜んでくれるかなと不安でいっぱいだったけれど、だんだん楽しくなってきました。上手にかけることもできなかった声も、ちゃんとかけることができるようになってきました。

外は冷たい風が吹いていて寒かったけど、心があたたかくなつていくような気がして、あまり寒いとは思いませんでした。それだけ集中してできたということだと思います。留守で、お年寄りの方がいない所も、一緒に行つた民生

児童委員の方が、近くの旅館の人に渡してもらうように、頼んでくれました。

この授業を通して、私は、いろいろなお年寄りの方々とふれあえて、とてもよい経験をしたと思います。お年寄りの皆さんが、とても感謝をしてくれて、笑顔が増えて私自身も笑顔になりました。とてもうれしかったです。

私の家にも八十歳になったおばあちゃんがいます。いつも私にぬい物の作り方やミシンの使い方を教えてくれる優しいおばあちゃんです。うちのおばあちゃんにも家庭科や農業科で学習したことを生かして、元氣と笑顔をあげられる物を作ってあげたいと思いました。そして、もっともつと長生きしてほしいです。

お年寄りに配る赤飯

熱塩小学校 五年 小林 明夏

私たちの学校では、「笑顔の赤飯配り」を行っています。笑顔の赤飯配りとは、自分たちで育てたもち米と小豆で心を込めて赤飯を作り、一人暮らしをしているお年寄りに届ける学習です。

前日に、お年寄り一人一人にお手紙を書きました。その手紙と赤飯と一緒に渡して、お年寄りの皆さんに、「元氣」と「感謝」の気持ちを込めて、もっと元氣に長生きしてくれるように願いながら学習を進めました。

私は友達と一緒に七人のお年寄りに赤飯と手紙を届けました。最初に、甲斐正子さんと小林マサ子さんという二人のおばあちゃんに渡しました。二人ともとても喜んでくれたので私もうれしかったです。次に、遠藤テルさんというおばあちゃんに赤飯と手紙を渡しました。テルさんは、泣きながら

「ありがとうございます」

と言ってくれました。まさか泣いて喜んでくれるとは思っていなかったのです、びっくりしました。それと同時に、とてもうれしくなりました。

次に荒井照代さんと荒井武人さんに赤飯と手紙を配りました。配りながら私は、

「元氣でいて下さいね。」

と声をかけました。二人ともとても喜んでくれました。

最後に、荒井政子さんと荒井マサ子さんという同じ名前二人のおばあちゃんに渡しました。二人とも夢の森にお風呂に出かけていたので、民生児童委員の皆さんと一緒に夢の森まで行って渡しました。二人ともとても感謝してくれたのでよかったです。

私は、この「笑顔の赤飯配り」の活動をやつてよかったと思います。なぜなら、今の熱塩をつくり私たちを育ててくれたからです。また、お年寄りに「元氣」と「感謝」の気持ちを伝えることができたからです。これからは、お年寄りをもっと大切にしたり、尊敬したりしたいと思います。

食べ物の大切さを学んで

高郷小学校 五年 唐橋 凜

ぼくは学校の農業科の授業で野菜作りや米作りなどを学びました。

はじめは野菜なんて種をまいて水をあげれば勝手に育つと思っていたけれど、実際にはとても手間がかかるということを知りました。

野菜作りは始めに土と肥料をまぜた所に、くわでうねを作りそこに種をまきます。芽が出るまで雑草をこまめにぬいて水をあげます。そして、芽が出て来たら一つ一つに栄養が行きとどきよく育つように、間引きという作業をします。最後に、野菜が大きくなったら収穫します。

次にお米は、農業支えん員さんが水田をうなつてくれたので、そこへ十五センチくらいのなえのかんかくを開けて植えていきます。ぼくはこの小さななえが秋には本当にお米になるのか不思議に思いました。

そして秋になり稲刈りの作業をしました。黄金色にたわわに実った稲をかまを使って刈り取ります。稲が少しかたく刈り取る作業がとても大変でした。そして二・三束にまとめてあさひもでしばりほしました。今年は天候が悪くだったこの作業が出来なかったけれど、お米になるまでにはいろいろな作業があることがわかりました。

稲刈りをした日家に帰って夕ごはんはんに白米を食べた時に、

（このお米は農家の人が大事に育てたお米だから、感謝して食べよう。）もし自分が生産者の立場で残されたり捨てられたりしたらとても残念な気持ちになると思います。さまたまな食べ物を大切にそして感謝の気持ちをわすれずに食べようと思います。

農業は食べる喜びを教えてくれるし、作る楽しさも教えてくれることを実感しました。

農業科を学習して

熊倉小学校 六年 磯部 実悠

みなさんは農業科という学習を知っていますか。私の通う熊倉小学校には農業科という学習があります。農業科の学習は四年前から喜多方市で始まりました。農業科の学習は主に畑、田んぼの二つに分けられます。

田んぼは、五月の末ごろに五年生といっしょにおこないます。毎年田んぼをかせてくださっている山口さんに教えていただきます。私は、今年で二回目なので昨年にくらべてスムーズに植えることができました。田植えが終わると次は稲刈りです。稲刈りは十月のなかばにおこなわれました。稲刈りも五年生といっしょにおこないました。今年の稲刈りは前日に雨がふり土がドロドロになって移動するのが大変でした。収かくした米は十一月十二日におこなわれた調理実習でつかいました。

畑では、始めに支援員の方といっしょにうねたてをしました。次にマルチをかけて苗を植えます。私は、ミニトマトを育てました。毎朝水をあげに畑に行き、わき芽を取ったりしました。そして夏休み前には、赤くなりとてもあまいトマトができました。夏休みもみんなが集まって、水をあげたり草をむいたりしました。そして十月の前半に収穫した野菜をみんなで食べました。そして十月の前半に収穫したさつまいもは、学校行事のいも煮会で焼きいもにして食べました。みんなおいしいと言って食べてくれてうれしかったです。このように私たちは、すばらしい自然の中で過したり作物を育てたりすることができなのです。でも今、地球温暖化で作物がじゅうぶんに育たなくなっています。このまま地球温暖化が進み作物が育たなくなってしまうたらどうなることでしょうか。このように、私たちの生活と農業はかわりをもっているのです。農業科の学習は私に野菜の育て方を教えてくれるだけではなく、かんきょうと農業のかかわりを教えてくれました。これからは、農業科というすばらしい学習が全国、多くの世界に広がってくれるといいなと思いました。

協力することの大切さ

堂島小学校 六年 富田 夏芽

私は、農業科を体験して、考えたことが一つあります。

それは、「多くの人と協力し合う」ことについてです。

私は、農業科が好きで、自分たちで種をまき、育てた野菜を収穫することで、とても達成感が味わえると思います。祖父協力員のみなさんや、先生方と協力しあって、野菜を作るのは、とても楽しいです。でも、作業をする子どもたちの中には、一人で勝手に遊んだり友達と話したりして、作業をさぼる人もいます。きつと、農業は労働で、いやになっているのだと思います。

でも、農業は、人と人との関わりをもつこともできる、いい存在に私は思えます。私は前までは、農業は苦手で、今でもありささえられないのですが、協力をし合いながら作物を作る楽しさに農業の魅力を感じました。現在は、農業は機械化が進んでいますが、昔の手植えやころばし除草を体験することで、昔の人の大変さを味わうことができました。

農業は、重いものを持ち上げたりする力のいる仕事です。だからこそ、一人ではできない仕事です。祖父協力員のみなさんや先生方、友達の協力があつてできるということにも、農業ってすばらしいなと感じました。

現代の社会では、テレビやゲームに熱中して、他の人間と関わりを持とうとしない人が増えてきているそうです。私は、そういう人に、農業科を体験してもらいたいと思います。きつと、人と協力することの大切さや、農業の楽しさが伝わると思います。

野さい作りをやつて

加納小学校 三年 長井 穂乃実

「へえ、そうなんだ。」

わたしは野さい作りをやつて、びつくりしたことやはじめて知ったことがあります。

一つ目はいも植えです。はじめは、じゃがいものたねがあるのかなと思つていたけれど、植える時、いもを半分に切つてそのまま植えたので、すごくびつくりしました。

二つ目は間引きです。間引きでは、はじめて知ったことがあります。それは、間引きをしないと野さいがあまり育たないということです。なので、にんじんと大根とどうもろこしの間引きをいっしょうけん命やりました。その時、大きいのを取らないように気をつけました。

三つ目は、虫とりです。九月ごろから虫とりをはじめました。白さいの虫とりをしました。さがす時、けっこう大へんでした。けれど、虫とりをしないと、野さいが虫に食べられることを思うと、真けんに虫をさがしました。あまり虫は見つけられなかったけど、少しだけ見つけられたのでよかったです。

さい後に野さい作りをして、学んだことが二つあります。

一つ目は、野さい作りを毎日している人は、こんなにたくさんのかんことをやつてゐることを学びました。たとえば、たくさん虫とりをしたり、たくさん間引きをしたりしていることを思うと、ちよつと大へんだなと思つたけれど、やらなければいけないということを感じました。

二つ目は、一つのことをとつても真けんにやらなければ

いけないということです。真けんにやらないと野さいがあまり育たないので、一つのことをほんとうに真けんにやらなければいけないんだなと思ひました。

野さい作りをして、はじめて知ったことや学んだことがたくさんあつてよかったです。

【第一次審査通過作品】

大豆の育て方

松山小学校 三年 川口 遼香

「今日は、大豆をまきに畑に行きます。」

と先生が言ったので、みんなで畑に行きました。

そこには、畑の先生がいました。赤い豆をもっていました。

「さあ、みんなでこの豆をまくよ。」

と言ったので、

「大豆ってあれなの。先生が大豆といってたからあれなんだよね。」

と思いました。そうだったんです。カラスに食べられないように豆を赤くしてあるのです。

それを、畑の土にまきました。土はとってもふわふわしていたので、大豆をまいてもきゅうくつにならないなあと思いました。

それから、何日かたって草むしりと土よせをしました。草がぼうぼうでもえてる火みたいだったけれど、おいしい食べものになるように、草をむしってとってもきれいにしました。土よせは、めが出てとっても大きくなったので、たおれないように土をよせました。

また、それから何日かたって、今度は大きく育った大豆

をいっしょうけんめいぬきました。それを一りん車にのせました。一りん車の六台分でした。こんなに、育ったのも畑の先生のおかげです。

のうぎようかの勉強はじめてで、育てるのがとっても、たいへんだなあと思ったけど、楽しかったです。

これから、大豆の料理を学校や家でするときは、畑の先生に教えてもらったことを思い出して、作ったり、食べたりたいと思います。

田植えや稲刈りをした時のこと

上三宮小学校 三年 川勝 俊

五月の田植えは楽しかったです。

一年生と二年生の時は、田んぼの中でころびそうになったり、植える所がよくわからなかったりして、あまりうまくできませんでした。三年生になって、しどう員さんからおしえてもらって上手にできました。

十月の稲刈りもかまで稲刈りをしました。かまでかる時は少しこわかったけどしどう員さんからしどうしてもらってしどう員さんに、

「俊君、上手だね。」

と言われて、うれしかったです。いっしょうけんめい稲をかったり、運んだりしたので、汗をいっぱいかきました。農家の人たちは、五月の田植えから秋の稲刈りまで、いっ

しようけんめいせわをして育てているから、ぼくたちは、毎日、おいしいご飯を食べられると思いました。

「ばあちゃん、ぼくのうちは、どうして田んぼも畑もないの。」

て聞いたら、ばあちゃんは、

「俊のひいじいちゃん、ひいばあちゃんの時からなかったからなあ。」

と言いました。そして、ばあちゃんは、

「俊が大人になったら、田んぼと、畑をつくられるようになるといいなあ。」

と言いました。ぼくは、

「考えてみるからね。」

と言いました。

十一月七日は、しゅうかく祭をしました。先生がたとしどう員さんとおうちの人とで、おにぎりといも汁を作っていただきました。お父さんは、

「俊たちの、作ったご飯はおいしいな。」

と言いました。うれしかったです。

自分たちが作った米のおにぎりは最高です。今日は、楽しいしゅうかくさいでした。

はじめての農業科

熊倉小学校 三年 齋藤 響子

私の家のじいちゃんとはあちゃんは農業をしています。食事に食べている米、野菜など出てくるのは、あたり前だと思っていました。

ばあちゃんが、

「家では、米も低農薬、野菜は、無農薬でつくっているから大変だよ。」

と言っても、私たちは、うわの空で聞いていました。

今年、農業科で、すいか、きゅうり、大豆を作りました。すいかは、夏休み前は、中くらいの大きさで食べれそうもありませんでした。休みが終って畑に行ってみると、一個もなっていないませんでした。ああーざんねん、何にやられたんだろうと思つて、ばあちゃんに聞いたたら、すいかは、カラス、くま、たぬきなどの大こうぶつなので、ネットやかみをぶらさげて、守らなければいけないそうです。それでも、くまにやられてしまった家は多いそうです。

すいかはとれませんでした。みかちゃんのお家で大きなすいかをもつてきてくれたので、食べることができました。あまくて、とってもおいしかったです。

それでも、きゅうりはとれました。きゅうりは一日ですぐ大きくなるので、畑に行くのをわすれると、バナナ色の大きなものになってしまいました。きゅうりの枝にバナナ

がなっているようでおもしろかったです。

大豆は、一つのあなに三つずつまき、一番大きいのを一本のこして、育てました。まもなく畑からとってきますが、どのくらい豆がついているのか楽しみです。

今年一年間、大地君やかえでちゃんのおばあちゃんの世話になりながら、いろいろ勉強してきましたが天気によって色々かわる農業は大変だなあと思いました。

これからは、少しずつ家の手伝いをしながら、野菜のこなどしていききたいと思いました。

じゃがいもほり

熊倉小学校 三年 佐藤 楓子

夏の終りに、おじいちゃんとわたしで、山の畑にじゃがいもほりに行きました。

暑い日の午後、わたしはぐん手をかけて、おじいちゃんがほつたいもをはこにつめました。畑が大きくてほつたじゃがいもがいっぱいとれました。わたしだけでは、とってもむりだと思いました。

おじいちゃんもわたしも、あせをかきながらがんばりました。ちよっときゆうけいしたときに、空を見ると、トンぼがいっぱいとんでいてびっくりしました。

おじいちゃんの作っているじゃがいものしゅるいは、大きいのはだんしゃくという名前で、少し小さいのはきたあ

かりという名前です。だんしゃくの色は白で、きたあかりはきいろだと教えてもらいました。食べると、きたあかりの方がやわらかくなるそうです。

わたしは、カレーライスとみそしるに入ったじゃがいもが大すきです。

さいきん、おじいちゃんが足とこしが、
「いたい、いたい。」

と言っているのを聞いたので、お手つだいをしてあげたかったのでもいっしょに行きました。

いつも畑にはいかないのですが、これからはいろんなやさいをとりに行ったり、お手つだいをしに行ったりしたいと思います。

おじいちゃんが、

「お手つだいありがとう」

と言ってくれました。とてもうれしかったです。

学校のきゆうしよくにでてくるやさいもいろんな人が作っているの、のこさないで食べようと思います。そして、おじいちゃんのお手つだいをして分かったことを、のうぎょうかに生かしたいです。

学校のうぎょうかの学習もとてもたのしくて、わたしはのうぎょうかが大すきです。

つるをのばすカボチャ

豊川小学校 三年 大江 純

さいしよに先生がたねをわたしたとき、わたしはびっくりしました。だって、カボチャのたねがきれいな赤色をしているんですもの。

カボチャのたねを見たことがないので、なおさらびっくりです。ほかのスイカやトウモロコシにくらべとても、目立っていました。

なえうえは五月にしました。土につめと同じぐらいのあなをほって、たねを入れて土をかぶせて、水をかけたらほけん室の前におきました。

家に帰ってみるとばあちゃんが、

「畑しごとは、心をこめていつも大きくなれと思っていればきつとおいしい野さいになるよ。」

と教えてくれたので、わたしは

「大きなあれ。」

と言いました。

それから半年がたって、ゆたかつこはつびよう会ではのうぎよう科のことをはつびようしました。

詩ではさいごに空をつかもうとしている。

とみんなで大きい声で言ったので、本当に今わたしたちのそだてているカボチャも空をつかもうとしているのかなと考えてしまいました。

カボチャを見てびっくりしました。本当にびっくりするくらいつるをのばしていました。カボチャのつるがパイプのトンネルにつるがはみ出すくらいすごく大きくなっていました。

一番かんだうしたのは、いっぱいつるをのばして、学校でも家でもおいしいと言ってよろこんだカボチャです。

カボチャは、あまくにつけて食べたし、家では、チーズとまぜてカボチャをつぶして食べました。

おいしくてとてもかんだうしたからまた食べたいです。

カボチャとスイカ

豊川小学校 三年 古川 結葉

わたしがカボチャのたねをうめようとしたら、カボチャのたねは赤くそまっていました。それは、びょうきにつよくするためだそうです。それから大きくなったので、そこからしえんいんのあべ先生に教えてもらいました。カボチャのトンネルをくぐってみると、大きなカボチャがいっぱい実をならしてました。すごくびっくりしました。わたしがものすごくびっくりしたのは、花にはめばなとおばながあったことです。したが丸くなっているのがめばなで、したがふくらんでないのがおばなだということがわかりました。はつばは大きくて、まるでハートの形に見えました。カエルのかきになりそうです。夏にカボチャのトンネルに入る

と、うそのようにせずしかったです。夏休みが終わりしゅうかくしました。できたカボチャをグループで切つてにました。すごくおいしかったです。あまったカボチャをいえにもつていきました。おかあさんがよろこんでいました。うれしかったです。

わたしは、のうぎよう科でスイカもうえました。たねをまくときは、こんな小さいたねでそだつのかなあとおもいました。さいしよにポットに入れてから、水をあげて六月八日にめがでてびつくりしました。お母さんにめが出たことを教えたなら、「声をかけてやると、お花は聞いてくれるんだよ。」と言つてくれました。大きくなつてくれるかなあと思いました。声をかけると、すこしずつ大きくなつてくれました。スイカが大きくなつたので、ポットからはたけにうつすことになりました。すこしずつ花をさかして大きくなつているのを見ると、学校にくるのが楽しみでした。そうごうのとき、はたけにいつてみるとスイカが大きく実をならしていました。もつてみたらずつしり重かったです。

みんなで作るえ顔

熱塩小学校 三年 遠藤 伶菜

わたしたち三年生は、春から野菜やいねを学校の畑や田んぼでさいばいしてきました。

秋になり九月二十九日、いよいよ「いねかり」です。い

つも育て方を教えてくださるよしまささんやすがいさん、地いきの方といっしよに、いっぱい実った田んぼに入りました。田んぼや土はやわらかくて、わたしは友だちと土にうまつてばかりで、いねをしぼるのが大へんでした。だけど、田んぼに入る前に、去年みんなでしゅうかくしたお米で、地いきの方がにぎつてくれたおにぎりを食べたので、すごくパワーが出てきました。友だちも、

「おいしい。」
と言つて食べていたので、みんなもパワーが出てがんばれると思います。

一、二年生はいねを運ぶ仕事、三、四年生はいねをしぼる仕事、五、六年生はいねをかる仕事をしていました。長ぐつが土にうまつてうごけなくなつた時、地いきの方がひつばつてたすけてくれました。わたしが、

「なぜ、うまらないんですか。」

と聞いたなら、

「コツがあるからだよ。」

とおつしやっていました。まわりを見ていたら、わたしたち三年生はみんなうまつていて、地いきの方々がわらっていました。みんながわらつてくれて、にぎやかで楽しかったです。

地いきの方の様子をみていたら、いねをかつたきりかぶをのぼつて歩いていました。うまらないコツがわかつてすごいなと思いました。

わたしは、家の手つだいでカマでいねをかつたことがあ

ります。いねをかる仕事は、とってもおもしろかったです。高学年になったら上手にいねをかりたいです。今から、とても楽しみです。

とうもろこし

堂島小学校 三年 鈴木 光

ぼくはとうもろこしのたねをまきました。まく時に、指一本分の深さで、びっくりして入らないと思ったけど、入ったのですごくと思いました。

そして、毎日水くれをしてると、たねからめがでて、「すごい。」と思いました。

また、三日ぐらいたつとまためが少し育っていました。ぼくは、

「また育ってる。」

と思いました。けれど、夏休み中に、水くれをやっていないから、

「だいじょうぶかなあ。」

と思いました。

そしたら、プリントがくばられました。ぼくは少し読んではたら、びっくりしました。プリントに、夏休み中にも、こうたいこうたいで「水くれをやります」と書いてあったので、ぼくは、

「よかったー。」

と思いました。

そして、ぼくの当番の日の帰りに板橋先生が、「トマト一つこずつもっていいですよ。」

と言ったからもらいました。ぼくたちは、

「ありがとうございました。」

と、お礼をしました。

そして、その帰りにトマトを食べてたら、

「そういえば、ぼくしみるといたんだった。」

と思いだしたけれど、ひとかじり食べちゃいました。あとはがまんして、家にかえってばちゃんに、

「トマトあげる。」

と言ったら、

「ありがとう。」

と言つて、食べてくれました。

そして、夏休みが終わって見に行ったら、育っていたのでよかったです。とうもろこし料理は楽しかったしおいしかったです。

いろいろなやさい

姥堂小学校 三年 大塚 天音

四月にポップコーンと大豆のたねまきをしました。わたしがはじめて分かったことは、大豆のたねは水にま

めをうるかして、しずんだまめがたねになることです。水にうかんだかるいたねは、めが出ないことがあるからだそうです。

ポップコーンは、実の色がこくなってきたら、手でプチプチと取りました。うちでは、ポップコーンの実をかわかしましたが、学校では、葉やくきがかれるまでまって、しゅうかくしました。その実がたねになるなんてびっくりしました。

ポップコーンのたねとりは、とても大へんでした。いっぱい手にまめができました。すごく良かったです。

きゅうりとミニトマトのチョコちゃんカロちゃんのなえうえを五月にやりました。のうぎようしえんいんのさかい先生は、しんけんにゆつくりおしえてくださいました。どうやれば上手にうえられるのかやきゅうりやトマトのなえは、やさしくささえのぼうにむすぶこととか、いろいろおしえてもらいました。

ささえのぼうとくきをジョイントでむすぶときは、くきやえだができつかないようにやさしくしなければなりません。

きゅうりは、大きくなる前にしゅうかくします。太くなると味がうすくなります。一番おいしい太さを考えてしゅうかくします。

でもすてるともったいないので、友だちはサラダにしたいろいろなくだものとまぜたりして食べたそうです。わたしもサラダにして食べようと思いました。

これらのかつどうで、わたしはのうぎようかつてすごくなつて思いました。毎日悪い虫がついていないか調べたり、たねをまく前に畑をたがやしたり、やることがたくさんあつて大へんだと思いました。これからは、一生けん命育てたやさいをすききらいをしないで食べれるようになりたいです。

しゅうかくしたおいしいすいか

駒形小学校 三年 大堀 瑞希

三、四年生ですいかを作りました。

わたしは、りようまくんと、すいかを植えました。

さいしよは、なえから植えました。そして夏休みの時に、すいかの様子を見に来たら、大玉がありました。小さいすいかは二つありました。

そしてりゅうやくくんが大玉を一人で持っていたけれど、わたしはすごく重かったです。

学校に持っていつて、すいかを先生が切ってくれました。そして先生が、

「何色だと思えますか。」

「真白だと思えます。」

と、美月ちゃんが言いました。

みんなは、

「真つ赤。」

と言いました。先生はすいかを切りました。そしたら、真っ赤でした。みんなは、

「おいしそう。はやく食べたい。」
と言いました。

星花ちゃんが、
「小さいほうがあまい。」
と言いました。

わたしは、よくばって食べたなら、おなががいっぱいになりました。のこった半分はもったいないので全部食べました。とってもおいしかったです。

じ童クラブのみんなにもあげたら、まつ本先生が、
「ありがとう。」

と、よろこんでいたのでうれしかったです。

おやつの時すいかが出てきて、じ童クラブのみんなは、
「おいしい。」

と、言いました。

四年生になったら、また育てたいです。

育 つ

山都小学校 三年 齋藤 颯人

六月七日、さつまいもを植えました。植え方は、小沢さんに教わりました。植えるのはむずかしかったけれど、なんとか植えられました。その時ぼくは、(次にきた時は、

どうなっているのだろう)と思いました。

七月六日、ぼくは畑に行く前からわくわくしていました。さつまいもがどうなっているかが、見たかったからです。畑につくと、かんさつしました。すると葉っぱができていました。よく見ると、葉っぱの色は緑色でした。葉っぱの形はハートがたになっていて、さわってみると少しざらざらしました。でも、少しだけ虫に食べられている所がありました。ちよつとざんねんでした。

七月十六日、畑に行くと、つるがビニールシートからはみでていました。葉っぱの形がハート形からかわっていたのです。いいイモになりそうです。

八月二十七日、夏休みが終わり畑に行くと、草がたくさんはえていました。それから、みんなで草むしりをしました。草は、ぬこうとしてもぬけない物があります。でも強くひっぱりすぎると転んでしまいます。ぼくは、はじめて草むしりがたいへんなことを知り、農業をしている人は、とてもたいへんなことを知りました。

十月十八日、さつまいもほりに行きました。畑に行く前から友だちと、

「何ことれるかな。」

などと話していました。畑に行くと、つるがのびていました。なえを植えた時とくらべると、大きくなっているようです。その後、みんなでつるをたいひおきばまではこんでいき、いよいよほりです。ほる時は、スコップでほりました。すると、大きなものがほれました。とてもうれし

かったです。先生がいを一つずつみんなにくれました。家ではみそ汁に入れて食べました。とてもおいしかったです。

さつまいもを育てて、食べたよ

山都小学校 三年 竹田 琉莉

わたしは、山都ほけんセンターの前の畑でさつまいもを先生と三年生の全いで、つくることになりました。さつまいものうえ方はしえんの小沢さんに、教えてもらいました。うえる時は、

「きれいな大きないもに育ってくれるかな。」

と、ふあんがいつぱいでした。でも、総合のじゅぎょうで、見て根が大きくなつてくると、

「だいじょうぶだな、大きくなる。」

と思いました。

「いもほりはやくしたいな。」

と見ていくうちに思いはじめました。

六月七日にうえても、七月六日には葉がうえた時よりも少し大きくなっていました。

そして八月十七日に初めて畑のさつまいもを見たら十三センチくらいになっていました。

さつまいものしゅうかくになると、すごく大きくなっていました。さつまいもほりはペアをくんでほることに

しました。わたしは、のえさんとペアをくみました。わたしがさつまいもをほつたら、のえさんが、

「大きいね。おいしそうだね。」

と言ってくれました。わたしは心の中で、

「うれしいな。」

と思いました

のえさんにわたしも言つてあげたら、うれしそうな顔をしていました。

十一月二十五日にさつまいもをちゅうりして食べました。このりようりは、はん分にかれてつくりました。一ぱんと二はんはスイートポテトをつくり、三ぱんと四はんは、さつまいものきなこだんごをつくりました。そして五はんはむしパンをつくりました。このりようりはすごくおいしかったです。このりようりで、お家でつくつたのがむしパンです。家族みんなが、

「おいしいな。おかわり。」

と言つてなんこも食べました。すごく心にのこりました。おいしかったです。

かぼちやを育ててみて

松山小学校 四年 福島 諒華

私たち四年生は、かぼちやなどを育てています。先生が、「明日かぼちや植えをします。」

と言った時、私は牛ふんが入ることを知っていたので、くさい牛ふんを手で入れてまで食べなくてもいいと思いました。そのことを思ったのは、私はかぼちやがあまり好きではないからでした。

そして次の日です。約束どおり、かぼちや植えの農業科の時間が来ました。私は、いやだと思いつながら畑に行きました。そして私が一番やりたくない牛ふんを入れる作業に入りました。先生が、

「農業科のリーダーさん、牛ふんを入れてください。」

と言ったので、とうとうやらなきゃなと思いつながら行きました。牛ふんをさわったら、ブニブニしていてもくさかったので、思わず近くの穴に投げてしまいました。それぐらい気持ちが悪かったです。

それから、何日かごとに草むしりをしました。いろいろな虫が出て来ていやな気持ちになったけれど、がんばって続けました。

楽しみにしていた収穫の日が来ました。

私は両手でかぼちやを持ってねじってみました。そして思ったよりもかんたんに取ることができました。取ったかぼちやをならべたら、大きいのが小さいの、虫に少し食べられていたものもありました。植えた場所も、ひ料も同じなのにとっても不思議だなあと思いました。小さかったかぼちやのなえが、牛ふんを入れたことで大きく育ったこともびっくりしました。

そんなことまでして食べなくてもいいと思ったかぼちや

といっしょに入れたくさかった牛ふんもぜんぜんむだではなく、ちゃんと役に立つひ料だなあと感じました。すごく大変な作業がたくさんあったけれど、すごくいいけいけんになったし、牛ふんの役わりを知ることができて、一ついい勉強になりました。

おいしいじゃがいも作り

関柴小学校 四年 赤城 菜々香

私たちは、春にじゃがいもの種まきをしました。じゃがいもは、メイクインと男しやくとキタアカリの三種類です。最初は、支えん員さんに畑をたがやしてもらって、次に、小さなじゃがいもを半分に切つて、切つたほうを下にしてまきました。支えん員さんに

「いもは何種類ぐらいあるんですか。」

と聞いたら、

「世界には、三百種類位で日本は百二十種類位かな。」

と教えてくれたので、そんなにあることは初めて知りおどろきました。また、

「いもは、何ヶ月位でできるんですか。」

と聞いたら、

「だいたい四ヶ月か五ヶ月位でしゅうかく出きるかな。」と教えてくれました。

私たちは植えてから芽が出るのを楽しみにしていたら、

二週間位すぎてやっと芽が出たのでみんなは、

「芽が出た、芽が出た。」

と喜びました。小さい緑色のかわいい芽でした。芽はこれから大きくなろうとしていっしょうけん命生きるので、大切に育てて行きたいと思いました。だから朝に水をやりたり総合の時間にみんなで協力して草むしりをしたりしました。

芽は草にも負けないでぐんぐんのびていました。

九月になっていもを収穫しました。大きいもやすごく小さいも、中にはネズミに食べられていたいももありました。私たちの作りたいもはおいしいからネズミに食べられたのかなあと思いうれしくなりました。いもを家に持ち帰って、家族といっしょにいろんな料理を作って食べたらみんな、

「このいもは特別おいしい、おいしい。」

と言って笑顔で食べてくれました。私はうれしかったです。支えん員さんをしようたいして、じゃがいもパーティーを開きました。カレーとポテトサラダを作ってごちそうをしたら、支えん員さんは、

「これはおいしい。」

と食べてくれたので良かったです。

大変ないね育て

関柴小学校 四年 小田切 翔希

ぼくのじいちゃんは、いねを育てています。

三月末に、種もみを十八日間水にひたして芽を出します。それから、土を入れたなえ箱に、播種機で種をまきます。種をまいたら箱をハウスにならべて、なえを作ります。じいちゃんは、元気ななえが育つように毎朝水をくれています。

五月に入ると田んぼにひりょうをふり、大きなトラクターで田うないをし、それから、水を入れてしろかきをしています。トラクターはキャビンつきなので、雨がふつても、じいちゃんはお仕事を休まずにやります。大きな八じょう植えの田植え機で、なえを植えます。三月から五月までも、毎日休まずにやっているから、大変だと思います。

六月には、田んぼがかわくようにみぞたてをやっています。草が生えないようにじよ草ざいをふります。

七月には、水を入れたり、かわかししたりして、あとは、草かりをしています。暑い時期に草かりをするのは、大変だと思うし、熱中しようにならないのは、すごいと思います。

八月には、いねのほが出てきて、花がさきます。ぼくもいねの花を見たことがあります、とても小さくて黄色い花です。そのあと、七月と同じで、水を入れたりかわかし

たりするのをくりかえしてやっています。ぼくはむずかしいと思います。

九月には、田んぼ一面に大きなほが重たくなって、曲がってくるといねかりが始まります。田植えもいねかりも大変だけど、おいしいお米がたくさん実るとうれしい気持ちが大きくなると思います。四じょうのコンバインでいねかりをします。広い田んぼをいねかりするのは、むずかしいと思います。

今年は、九月に雨が多かったので、田んぼがやわらかくて、じいちゃんが大変だと言っていました。いねを育てるのは大変だと思いました。その年の天気や気温によっていろいろな世話がちがってくるので、こんどからはぼくも手伝ってみたいです。

暑さをのりきった野菜達

関柴小学校 四年 東條 純夏

私の家では、たくさん野菜を育てています。今年は、暑さで作物があまり育ちませんでした。学校でも、ジャガイモ、大豆、小豆を育てました。でも、予想してたよりたくさんしゅうかくできませんでした。十月に家でいねかりをしました。去年より、お米のしゅうかくが、少なかったです。野菜もしゅうかくが、少なかったです。

学校でしゅうかくしたジャガイモを家に持ちかえた時、

お母さんが、ジャガイモのチーズ焼きにしてくれました。メーカーイン、男しやく、キタアカリと一緒にいれてしまったけど、食べると味がちがうので、すぐに分かりました。どれも、おいしかったです。家族のみんなもおいしいと言ってくれました。おじいちゃんは、食べただけで、種類がすぐに分かりました。私は、すごいなあと思いました。おばあちゃんは、

「たくさんとれたんだね。おいしいよ。」

と言ってくれました。とてもうれしかったです。

休みの日に外に出てみると、いなほがたくさんビニールシートの上にありました。量は、多くみえたのですが、おばあちゃんたちは、全然少ないと言っていました。その夜新米を食べました。とても、おいしかったです。

暑さのえいきょうで、野菜などのしゅうかくは、少なかったですが、味はとてもおいしかったです。いつもおじいちゃん、おばあちゃんが育ててくれる米、野菜をこれから、ありがたくいただきますと思いました。

わたしのそだてたやさい

熊倉小学校 四年 川瀬 理奈

わたしたち四年は、農業科の学習で学校の畑に、トウモロコシ、スイカ、えだまめ、じゃがいも、おぼけカボチャのタネをまきました。

生物係の人と日直の人が、水をくれるお世話をする事にみんなできめました。わたしが日直当番の時は早く芽が出て来るように、たくさん水を畑にくれました。時々芽が出てないか気になり、畑に見に行ったりしました。

でも、すぐには出なくて、本当に出るか不安でした。四週間で小さな緑の芽が出ているのを見た時は、タネが死んでなくて良かったと思いました。

芽が出てからは、水やりの、他に草むしりの作業がはじまりました。草は、芽のえいようを、草に取られないようにするために、草むしりはだいじだと先生から教えてもらい、みんなで草を取りました。少し畑にいけないとすぐに新しい草が出てきて、大きくなってしま大変でした。

やさいの芽はなかなかでなかったのに、草はなにもしなくともすぐ大きくなるので、わたしは草ってすごいと思いました。

やさいの芽がだんだん大きくなり、トウモロコシはわたしの身長よりいつのまにか大きくなりました。スイカはほかのやさいの所までつるをのぼし、小さいスイカができていました。わたしは、早く大きくなってくれないかなと思草むしりを、ひっしにやりました。そのせいかかは、わかりませんがスイカはとても大きくなりたくさんできました。

夏休みに、みんなで、大きくなったスイカを食べました。とても、おいしくおみやげに一こもらいました。おうちにかえって、かぞくみんなであつというまにたべてしまいま

した。

わたしは、農業学習で、やさいをそだてるのは、すごくたいへんだけれど、できたやさいを食べる喜びをしり、とてもたのしかったです。やさいはたくさんのおいしいがあるので、勉強をしているいろいろなやさいをつくりたいと思いました。

農業の勉強をして

豊川小学校 四年 松崎 雪奈

私は、農業科の勉強をして色々なことがわかりました。それは、農業の大切さや作物を作る大変さです。農業科のじゅ業は、総合や学活の時間にやりました。

四年生で作った野菜は、芽キャベツ・カボチャ・大豆です。大豆は、えだ豆にして食べました。

畑には、〈ぼかし〉という粉に近いものをまきました。作り方は、まず、材料の米ぬか・とうみつ・魚かす・油かすを入れてよくまぜます。そして、たるに入れて二週間おいておけば、ぼかしの完成です。それを畑にまきました。一番最初にしゅうかくした野菜はカボチャです。カボチャはシチューにして食べました。私は、食べたたん、

「おいしいー。」

と言いました。二番目にしゅうかくした野菜は大豆です。大豆はえだ豆

にして食べました。えだ豆は、塩につけて食べました。できあがりには、ほんのり塩味がしました。すごくおいしかったです。

私は、農業はすごく大変で大切なんだなあと思いました。ごしどうしてくれた、安部さんには、すごくいい体験ができたので、とても感しやをしています。

私は、農業をしている人は食べてくれている人たちに、「おいしい。」

といってもらえるように、がんばっているんだなあと思いました。

いい体験ができてよかったです。これからも農業のことを勉強したいです。

農業科で学んだこと

慶徳小学校 四年 大竹 優太

去年から慶徳小学校では、農業科の学習に取り組んでいます。今年、ぼくたち四年生は、じゃがいも、にんじん、はくさいのさいばい学習にちょう戦しました。学校の近くに住むおじさんやおばさんが農業科の先生となって、種まきから収穫くまで、たくさんのことをご指導してくださいました。たいへんなことやおもしろいことをいろいろおしえてもらいました。

その中で、初めて知ったことがあります。それは、じゃ

がいもやにんじんやはくさいには名前があるということです。じゃがいもには、「だんしやく」、「きたあかり」という名前がありました。にんじんには、「五寸にんじん」という名前がありました。はくさいには、「めんこい」、「めごひめ」、「ストロング」という名前がありました。ぼくたちと同じように野菜にも、特ちょうのある名前があることがわかりました。

次に畑仕事がそれぞれの野菜にに応じて必要な作業があることもおしえてもらいました。野菜の育ちに合った種まきの時期があります。種まきの後は、水くれの世話が大切です。特に今年の夏は猛暑だったので一層たいへんでした。芽が出てしばらく育ったころは、間引きの作業がありました。せっかく育っても全部は育てられないということ、とても残念でしたが、必要な数だけを残して、あとはとつてしまわなければなりません。そしてひりょうをやつてそのあととんどんそだってきたら草をむしります。そしてしゅうかくします。みんな協力してもたいへんなのにおじさんおばあさんたちは、これをすくなくない人数でかんとんにやるからすごいと思いました。

二年間農業の勉強をして思ったことは畑仕事とかんたんに言いますが、畑は作るのがとてもたいへんで、うえたりそだてたりするのがとても勉強になりました。野菜をそだてるのはかんとんじゃありません。

白菜を育ててみて

慶徳小学校 四年 佐藤 祐斗

今年もぼくたちの学校では、農業科の勉強をしました。今年ぼくたちの学年で育てた野菜は白菜とジャガイモとニンジンです。ぼくの家でもこの三つの野菜は作っていてジャガイモとにんじんは、てつだったことがあるのでたねのまきかたから育ててしゅうかくまではしていました。でも白菜だけは、手つだったことがなかったのでわかりませんでした。

白菜のたねが小さかったことにびっくりしました。白菜は大きく育つので、たねも大きい物だと思っていました。まびきもやらなくても大きく育つ物だと思っていました。でも、まびきをやらないと栄養がたくとどかないので、大きな白菜に育たないということがわかって、まびきは大切な作業なんだなあと思いました。まびきをしてから白菜はどんどん大きくなって、しゅうかくの時期になってきました。その時、しえん員の方からどういうふうになっていく物が、しゅうかく時なのかおしえてもらいました。それは、なるべく葉がちぢまっていて、上の方がかたくなっている物が、一番いいしゅうかく時だとおしえてもらいました。ぼくは、たぶんしゅうかく時を知らないで家でおばあちゃんに、

「畑から白菜一つとってきて。」

と言われたら、葉がまだちぢまっていない一番大きい物をとっていたと思います。でも、今はちゃんと葉のちぢまった白菜がいいとわかったので、ちゃんとてつだいができると思います。

野菜を育ててみて感じたことは、手間をかけてあげると、おいしい野菜がたくさんとれると言うことです。農業には、少しずつの手間でも、たくさんかけてあげないといけないということがわかりました。

農業の感動

加納小学校 四年 宇内 真愛

私が、学校で野菜を作り始めてから今年で二年めになりました。今年は、三年生と、とうもろこし、じゃがいも、えだ豆、白菜など七種類の野菜を作りました。

どの野菜もできあがるまでは、いろいろな作業をしていくことが大へんだとわかりました。教えて下さったのは、岩下きよしさんとさわい春子さんです。

「草むしりや間引きも大切なことなんだよ。」

と言つて一しよに畑の野菜を見てくれました。夏休みに入つて私は、畑の様子が気になりました。暑さでかれていないか、からすに食べられていないか心配でした。登校日にしっかりとした野菜がしゅうかくできてとうもろれしかったです。夏に取れたとうもろこしは、家に二本持ち帰りました。と

てもあまくておいしいと思いました。じやがいもは、畑に二列に植えただけなのに、コンテナ六箱分ぐらいとれました。スコップでほりあげたらゴロゴロ出て来たのがおもしろかったです。

私は、畑で野菜を育てている時、青虫取りが一番いやでした。虫をさわれない人は、ゴム手ぶくろをはめてとります。この話を母に話した時、母は、

「えー、ウソ、そんなことするのー。大へんねえ。」と言いました。祖母は、

「虫がつくほどおいしい野菜なんだよ。」

と教えてくれました。青虫とりはこうたいでやりましたが、一つの白菜に十六ぴきもついていた時は、びっくりしました。

祖母のように一人で野菜を作ることができませんが、みんなで作って食べることは、とてもすばらしいことだと思っています。

大豆を育てて

山都小学校 四年 岩橋 妃奈

私は四年生になって初めて大豆を育てました。私は、「大豆の種ってどんなのだろう」「どんなふうに着つのだろう」という不安が少しありました。

そして私は、大豆の種を初めて見ました。大豆の種は、

うすい黄で丸かったです。私は大豆の種を見て、うす黄色の種が、あのはだ色の丸い大豆になると先生から聞いた時は、とてもびっくりしました。

そしていよいよ種をまく時がやってきました。私は、上手にまけるかなあと心配になってきました。でも、先生の言う通りにしたらちゃんとできたので良かったです。

数日後、大豆がちゃんと育っているか、観察をしに畑に行きました。昨日、雨がふったので、畑の土は、泥みたいになり、ドロドロになっていました。先生は、みんなに、

「ぬかりやすいので、気をつけて下さい。」

と言いました。私は、気をつけようとしたその一歩目ですぐぬかってしまいました。私はなかなか動くことが出来ず、友達に手伝ってもらいました。

そして、その次の日からは、猛暑が続く、ちゃんと大豆が育つか心配していました。でも、猛暑がおさまったころ、大豆を観察しに行った時、大豆は、きちんと順調に育っていたので、私は安心しました。

私は、総合の授業で、どれくらい大豆が収穫できるか知りたくて、一本の木からさやがいくつできていくかを調べてみました。すると、一本の木からさやは、多い物で三十五個から四十個ぐらい入っていました。

私は、今まで大豆を育てて、あらたにふしぎなことがありました。それは、豆ふーこを作るのに、大豆が何個ひつようかということです。私は、ほぼ毎日、豆ふを食べています。なので、大豆が何個ひつようかが、ふしぎになって

きました。大豆を通してたくさんのが学べそうになりました。私は、その一つ一つを勉強していききたいと思いました。

働くことの大変さ

豊川小学校 五年 風間 彩花

私は、この一年間の農業科をやってみて、初めてわかったことや感じたこと、思ったことがたくさんありました。わかったことは、作物には、生命があり、作物自身が、太陽や土、水などの自然の力をかりて成長していくということや、苗は、三・四本ずつ植えるという細かい作業がたくさんあって、農家の人は、とっても大変だということです。

稲の穂が黄色に色づき、田んぼの土が乾いたら、稲かりです。稲かりでは、刃の先がとがっているき險な道具がたくさんあったので、とても大変でむずかしい作業だったと改めて感じました。稲をかる時は、手の動作がとてもめんどうで、支援員の只浦義弘さんの話を聞いていると少しずつわかってきて、自分でやるのが楽しくなってきました。その日は、長ぐつをわすれてしまったので、服そうも大事だと思いました。次に稲ほしをしました。稲ほしでは、細かい大切なことを学びました。稲をかったあと、稲穂がこぼれていたらとる作業です。たくさんこぼれていたので、

大変でとてもめんどうだと改めて感じました。収かく祭では、自分たちで作ったお米でおにぎりを作りました。食べていると、いっしょうけん命に作ったお米が、頭の中に浮んでくるように感じました。

私は、おいしい米をつくるためには、さまざまな仕事があることがわかりました。どの仕事もかかすことができない大切なものばかりです。その仕事をていねいに、根気強く行うことで、おいしさの愛情がくわわると思います。

米作りに挑戦して

豊川小学校 五年 齋藤 優奈

みなさんは、農業という言葉聞いたら、どんなことを想像しますか。私は今年、米作りをしました。米作りを通して感じたことは、農業はすごく大変な仕事があり、大切だということです。

初めに、五月に田植えをしました。私の家は農家で米を作っています。でも、ほとんど機械で作業をしています。学校は、すべて手作業なので初めての体験でした。田んぼの土はどろどろしていて、入りたくありませんでした。だけど、おいしい米を作るためと思って入りました。私は、なえがたおれないように、ていねいに植えました。田植えでも、農業の大変さが分かりました。

私は、その日家に帰ってから、私のふだんの生活を考え

ました。私はあまり農業の手伝いをしませんでした。でも、田植えを実際にやってみて、農業の大変さがよく分かりました。私は家の農作業を休みの日など、進んでやってみていたと思いました。

次に十月、稲かりをしました。農家のおばあちゃんたちがお手伝いに来て下さいました。稲をかまで一束ずつかるのは、やったことがなかったのでどきどきしました。ですが、手作業でかると、だんだん楽しくなってきました。かり終わった稲を、自然かんそうするのを見たことがなかったもので、ぼうがけやさでがけを見た時、すごく手間をかけたかんそうすることを知り、びっくりしました。

終わりに、今年の農業科の米作りを通して思ったことは、いままで落ちていた稲を見ても、自分には関係ないと思っていたのですが、これからはもったいないと思って、ふまれないように田の方へ寄せてあげたいと思います。米や野菜は、農家の人たちが一生けん命作ったものだから、絶対に残さないで食べようと思いました。

来年も米作りをやりますが、今年と同じようにていねいに取り組みみたいです。

初めての米づくり

豊川小学校 五年 佐々木 優夏

みなさん、「農業科」という楽しさを知っていますか。私は、最初、米作りというものは楽しくないものだと思っていましたが、みんなで協力して米作りをしたら、楽しいということが、すごく分かりました。

五月に田植えをしました。サンダルをぬいで田んぼの中に入ろうとしたら、どろどろしていたし、クモのほか私のきらいな生き物たちがたくさんいました。すごく気持ちわるかったけれど入りました。みんなは、ふつうに入っていたので、すごいなあと思いました。

六月には、草むしりをしました。田んぼの中は、五月とちがってそんなにどろどろしてなかったので、スムーズに入れました。私のたんとうは、転ばしといって稲と稲の間の雑草を取るもので、それを動かしながら雑草を取って、つかれたら交かん交かんしながら、協力をしてやりました。ちゃんと、稲は育ちました。十月四日に稲かりをしました。お手伝いのおばあちゃんたちみたいには、できなかったけど、みんなと協力しながら、かったりもっていったりしました。もっていきこうとしたら、五十センチメートルから、六十センチメートルくらいのびていたもので、なかなかもてなくて三分ぐらいかかってしまいました。

十一月十一日に、しゅうかく祭をやりました。私は、お

みそ汁を作るたんとこの係でした。このときも、協力しながらやりました。

大根と、ねぎとえのきとじゃがいもを切ってから、煮て、だしの素とみそを入れて作りしました。最初は、おいしくないと思っていたけれど、食べてみたらすごくおいしかったです。

やっぱり、なんでも作る時は、協力はぜったい必要だということがわかりました。

来年は、今年より、何倍もがんばりたいと思います。

農家の人の大変さ

豊川小学校 五年 上林 絹

私は、農業科で初めて米作りを体験して、初めて農家の人の大変さに気づきました。

米作りをやる前、私は、機械でほとんどやると思っていたので、米作りはかんたんなものだと思っていました。私が体験したのは、ほとんど手作業でした。

豊川小学校の六年生と五年生に米作りを教えてくださいましたのは、農業支援員の只浦さんでした。

最初、苗の育て方を只浦さんに教えてもらい、ケースとバケツで苗を育てることになりました。約一カ月がすぎ、夏休みが終わり、只浦さんが学校にきてバケツで育てた苗を見せてもらい、六年生と五年生とで育てた苗と比べて見

ると、只浦さんが育てた苗は、ケースで育てた苗より育っていて、色がちゃんと緑色でした。六年生と五年生とで育てた苗は、ちゃんと育っていました。が、ちよつとかれてい

る部分がありました。私は、農家の人の大変さがそこで少しわかったような気がしました。

苗を植えてから約三週間がたち、苗も大きくなり田んぼに雑草が生えてきたので、雑草をとるようになりました。その時も大型機械を使わずに、ころばしという小型機械を押したり引いたり、大変な作業でした。私は、今より昔の農家の人が機械や農薬があんまりない時代は、食物など

つくるには、大変なことがわかりました。稲かりでは、しつかりと稲をつかんで、かまで切る作業を体験しました。

数日後、脱穀を行いました。もみとわらに分けました。私は、お米はすてる所はないと聞いたことがあるので、お米以外は何に使ったりするのか、調べて見たいなと思いました。

この一年間で私は、農家の人の大変さがわかり、本当にお米が一つぶ一つぶ大切なことに気づくことができました。来年は、今年の米作りの体験をいかし、今年よりもっとおいしい米をつくりたいです。

一年目の農業体験

豊川小学校 五年 山田 起熙

僕は、農業科を通して協力して、作業することの大切さを感じました。

田植えでは、足が土にとられながらも、みんなと協力しながら一本一本でいいいに植えました。苗を植え終えた時、田んぼを見てみると少し曲がってしまいました。でも、僕にとつては、ていねいにできたと思いました。みんなも一生けん命やって曲がってしまうのは、しょうがない事だと思いました。

六月には、五月に比べて十センチメートル以上も成長しておどろきました。水の管理や草とり、苗に消毒などもしました。草とりではコロボシという昔の機械を使いながら、草をしつかりとりました。水の管理は自然との関係なので、うまくいかなかったりもしてすごく苦労しました。消毒をする時はホースでやりました。みんなで協力してホースを持ちながら一生けん命消毒しました。消毒液の匂いはすごく強かったです。農業支援員さんは、

「体に悪いものではないので大丈夫だよ。」

と言っていました。その言葉を聞いた時、少し安心しました。

十月には稲かりをしました。僕たちみんなで協力して作ったお米を、しゅうかくする日がやってきました。みんなに

ここにこして、稲かりをするのを楽しみにしていました。稲かりはみんな協力し合い一生けん命やっていました。稲を束ねる際には、正しい結び方ができずに農業支援員さんにやっていただきました。手さばきがすごく上手でした。僕は、農業支援員さんのいいところをいっぱいぬすんで、おじいちゃんなどのお手伝いをいっぱいしたいと思いました。

十一月には、農業支援員さんやお手伝いをしてくださった方たちをよんで、しゅうかく祭をしました。僕たちが一生けん命作ったお米を食べる時、お米がツヤツヤしてとてもおいしかったです。来年は、二年目なので今年の反省を生かしてがんばりたいと思いました。

いつまでも農業を…

慶徳小学校 五年 加藤 伶

私は農業科の学習がとても大好きです。支えん員さんから、農業の大切さを学び、おいしい野菜やお米を作れるからです。

私の家では、農業をしています。おじいさんとおばあさん、ときにはお父さんも毎朝早くから夕方おそくまで、土にまみれて仕事をしています。毎日それを見てみると、大変だなあと思い、手伝いたくなります。手伝うとおじいさんやおばあさん、お父さんがしていた仕事の大変さや苦し

さが強く伝わってきます。

おじいさんに、

「農業はつらいし大変なのにどうして、元気で続けているの。」

と聞いてみると、おじいさんは、

「農業は大変だけど、がんばったらその後に、喜びやうれしさを感じることが出来るからだよ。つまり、おいしい野菜ができるってことだよ。」

とこたえてくれました。私は、おじいさんの話を聞いて、やっぱり農業はいいなと思いました。

農業では、野菜やお米を自然の中で作るの、どんなプログラミングがおこるかわかりません。でも、それを取りこえることによって、おいしい野菜やお米を作れるんだと思います。

私の住んでいる所は、自然豊かで農業がさかんな所です。これからも、農業を大切にしてほしいと思います。私も、大人になって、おばあちゃんになっても、この大切な農業を受けつぎ守っていききたいです。私は、いつまでも農業を愛し続けていきたいです。

野菜の気持ち

慶徳小学校 五年 佐藤 涼

わたしは、だいこん、さといも、じゃがいもの三種類の野菜を育てました。野菜は、土の中でどうしているのか、どうやって大きくなるのかを考えました。

まず、だいこんの気持ちです。

だいこんは、土の中で育ち、やがて大きくなり、ひっこぬくとまっ白な顔に茶色の土をつけて出てきます。水で顔を洗うと、まっ白なおけしようにして出てきます。顔を洗うと、気持ちいいなと思っています。

次に、さといもの気持ちです。

さといもも、土の中で成長し、どんどん兄弟を作っていきます。丸くてころころしていて、とてもかわいいなと思います。育っていく一日は、とてもにぎやかだなと思います。

最後に、じゃがいもの気持ちです。

じゃがいもも、やはり土の中で成長し、長い兄弟や丸っこい姉妹を作っていきます。さといもと似ています。ころころとかおを出して、とっても大きいじゃがいもや小さいころころのじゃがいもなどが顔をだします。とてもかわいいです。

わたしは、野菜が苦手だけど、こんなに野菜がかわいいなんて思いませんでした。

こうやってみると、通常食べている野菜ががんばって生きていたので、命をもらってわたしたちは、生きているんだとあらためて感じました。

「野菜さんたち、いつもありがとうございます。」と言ってあげたいです。野菜さん、本当にありがとうございます。

おいしくて楽しい収穫祭

熱塩小学校 五年 上野 奈津美

私の学校では、十一月の最初の土曜日に毎年収穫祭をしています。今年は、十一月六日の土曜日に行いました。

最初に、ふかしたもち米をうすの中に入れて、大人の人が少しだけきねでつきました。もち米は私たちが学校で育てたもち米です。

次に、出席番号順に五・六年生がもちをつきました。

「よいしょー。よいしょー。」

というかけ声が体育館中にひびきわたりました。力が強い友達の方が来た時

「思いつきりついちゃえー。」

と言いました。その子がつくと

「バシッ、バシッ。」

もちが音を立てていました。

私の番になって、きねを持つてみると思ったよりも重くて大変でした。

食べる時間になりました。

最初に食べたのはあんこもちです。あんこもちのあんこは、前の日に、私たち五年生が育てた小豆を使ってお母さんやおばあちゃんたちと作ったあんこです。

次に、つゆもちを食べました。毎年なのですが、やっぱりつゆもちが人気で、すぐに行列ができました。私が並んだのは前から二番目でした。テーブルの上に鍋があつて、その鍋の中につゆが入っていたので、自分でよそいました。テーブルの上には、私たちが育てた野菜で作った漬け物もありました。中学生になった私のお兄ちゃんも収穫祭に来ていたので、漬け物は多めにもらって来ました。

しばらくして、私の弟が

「きなこもちが食べたい。」

と言ったので、代わりにもらって来ました。弟も、

「おいしい。おいしい。」

と言って食べてくれました。

家族みんなで、収穫祭を楽しむことができました。来年も作物を一生懸命育てて、おいしくて楽しい収穫祭にしたいです。

笑顔の赤飯配り

熱塩小学校 五年 檜澤 翔太

ぼくは農業科の学習で、一人暮らしのお年寄りに赤飯を作って届けるという学習をしました。この赤飯には、自分たちが育てたもち米や小豆を使いました。民生児童委員の皆さんと赤飯を作ったり、届けたりしました。

前の日に、一人一人に手紙を書きました。

「この赤飯は、五年生が育てたもち米と小豆で作った赤飯です。これを食べて元気になって長生きして下さい。」と、心を込めて書きました。

当日の午後に、民生児童委員の方の車に乗って、赤飯を届けに行きました。初めに新崎地区を回りました。まず、渡部正一さんの家に行ってきました。正一さんは

「ありがとうございます。」

と言って、感謝してくれました。

次に、小松トク子さんの家に行きました。トク子さんは残念ながら留守でした。トク子さんの家はぼくの家の斜め後ろなので、夕方六時頃にうちのばあちゃんと一緒に届けに行きました。トク子さんも

「わざわざ家に届けてくれてありがとうございます。」

と感謝してくれました。

そのほかにも、佐藤虎彦さん、岩橋慧さん、伊東マチ子さん、若菜ヒサ子さん、佐藤スイ子さんに配りました。ど

の方もととても感謝してくれていました。喜んでもらえうれしかったです。特に、伊東マチ子さんは、普段から顔を合わせていて、いつも「まっちゃん」と呼んでいます。これから、会ったときに元気にあいさつをしたいと思います。

次に、御林地区の家を回りました。御林のお年寄りの中には

「ありがとうございます。」

と泣きながら喜んでくれた人もいました。なんだかぼくまで「じーん。」ときました。

今回、ぼくたちは、お年寄りの皆さんに元気になって、長生きしてほしいので赤飯を作りました。これからも病氣やけがに注意してぼくたちを見守ってほしいです。

大切な農業

加納小学校 五年 長谷川 望

私は、農業がとても大変なことなんだということが分かりました。地いきの人たちやじいちゃん、ばあちゃんを見て、水の管理などの細かくて、とても大変な仕事があるからです。

一つ目は、農業科のことです。私たちは、お米を一生けん命作りました。でも、私たちだけで作ったものではありません。田んぼの先生や地いきの人たちが手伝ってください

ました。その時に、先生は、水の管理や土のかたさなどの調整をしてくださいました。それは、細かいことだけど、とても大変な仕事だなあと思いました。農業では、土と水の調整が一番重要だと思います。でも、それを先生がやってくださって本当に大変なんだと思いました。

学校の田んぼは、手作業なので農業科のことをめんどくさいなあと思っていました。だから、米作りは、あまりやりたくありませんでした。でも、やってみると、だんだん楽しみになって、次の農業科は何かなあと思ってわくわくしてくるようになりました。

ころばしのように、大変な作業がたくさんあったけど、最後には、地いきの人たちや下級生に、

「おもち、おいしい。」

と言ってもらえるもち米を作ることができたのは、先生のおかげなので、めんどくさいなあと絶対思わないようにしたいです。

最後に、私がなぜそんなに農業を好きになったのかは、初めて知ったことが多かったからです。大変なこともあったけれど、最後には喜びが必ずやってくるということが分かりました。また、社会科で学習した農家の苦労や農業の大切さを実際に体験して知ることができて本当によかったです。

私の家では、じいちゃんとはあちゃんが田んぼと畑をやっています。いつも、大変だななどとは言わないで、一生懸命家族のために新鮮な作物を作っています。私は、当たり

前のように食べていたお米や野菜に感謝して大切に食べていきたいと思いました。

手作業の力

駒形小学校 五年 猪俣 雪乃

「田植えなんか簡単じゃん。」
と、私は思っていました。

なぜなら、家の田植えの手伝いをしたことがあるからです。

田植えを始める前に、支援員さんの説明を聞いているうちに、

「やつぱり大変かも。イメージしてたのと違う。」
と思いました。

私ที่บ้านで手伝いをしている時は、田植え機が簡単に苗を植えているのを見ていたので、手作業で田植えをしても、簡単にスポスポ植えることができるのかと思っていました。実際にやってみたら、機械では、苗を植えながら線を引いていたのに、手作業では、「ガジ」という道具を使って、縦と横に人が歩いて線を引かないと、苗をまっすぐに植えることができないので、手間ひまがかかって一つ一つが大変でした。

苗を植える作業では、一度に植える量が決まっていたので、手に持っている苗のかたまりがいつまでたってもなか

なか減りませんでした。

それに、初めて田んぼのぬかるみを裸足で歩きました。そしたら、うまく歩けなくて、足がぬけなくて転びそうになりました。

私は足がぬけなくて転びそうになって苦労したのに、すべて手作業でやっていた昔の人は、転びそうにもならないで、スムーズに苗を植えることができて、とつてもすごいと思いました。

これから、当たり前のように食べているお米をもっと大切にして、作っている人にも感謝して食事をしていきます。

農業の楽しさ

駒形小学校 五年 永澤 明

今年の農業体験おもしろかったなあ、楽しかったなあ。僕の頭の中にあるアルバムには、田植え、草むしり、いつも、「おいしくなってくれよ。」と、願いながらやっていたなあ。時には、泥んこだらけの時もあったなあ。

田植えをやった時は、初めてだったから、植え方が分かんなくなったり、転んで泥んこになったりしたことが色々大変だったけど、農業にしかないおもしろさがありました。それは、田んぼで作業して汚れる所です。そしてから、五年生みんなで田んぼに行つて様子を見に行きました。だん

だん稲が成長して来た頃に、草とりをしました。草とりでは、昔ならではの「ころばし」を使つてやりました。使い方は、農業支援員さんに教えてもらいました。僕は、やっている時に、おもしろくて、

「す、すげえ。」

と、言つてしまいました。僕は、ころばしを五回体験しました。おかげで草とりは、無事に終わりました。僕は、

「元気に実れよ。」

と、言いながらやっていました。今年をふり返ると猛暑の影響で農作物が不作になりそうなことをニュースで知りました。僕は、

「大丈夫かなあ。」

と、心配していました。しかし、学校の田んぼの稲は、ぐんぐんのびて成長しました。これには、みんなも、

「すごいなあ。」

と、驚いていました。

初めての米作りは、色々大変だったけど、楽しい思い出がたくさんできました。おかげで豊作でした。教わったことを忘れずに大人になったら農業支援員になって農業の楽しさを教えたいです。農業支援員さん農業の楽しさと米作りのやり方を教えてくださつてありがとうございました。これから農業の楽しさを忘れないようにたくさん農業の仕事をやりたいです。

はじめての田植え体験

駒形小学校 五年 渡部 茉由

「ヌル！」。

田んぼに足を入れると、どろに足がくいこんで転びそうになりました。

「なんか、こわーい！」。

と思わず一言。田植えは大変です。ひざから転んだり、せなかから転んだり、でもキレイではないけど、きちんとできて良かったです。

農業の学習で、初めて分かったことは、「がざ」を使つて、田に線をひいて苗を植えるということです。私は、おじいちゃんが田植えをする時、「田植え機」を使うので、手で植える必要が無く、キレイな列でした。でも手で植えると、ぐちゃ！になるんじゃないかな？と思っていました。「支援員さん」が、変な形のぼうを持つて田に線を引いていました。友たちもチャレンジしていました。支援員の方が、

「これは、『がざ』です。これで田に線を引いて、そのたと横の線が交わった所に笛を稲えます。」

と言いました。すると、

「へえー！」

と私たち五年生みんながそろって言いました。

きゅつ、きゅつと苗を田に植えると、ブニュ、ボニュッ

と変な音がしました。いろんな「自然」の音が聞こえて、田植えが楽しくなりました。

家に帰って、お父さんとお母さんに話をしたら、

「へえー！すごいね。手で苗を植えたのね。」

とお母さん。

「早くころばしを使って草取りやつて、稲刈りしたいね。」

とお父さん。

「うん！」

と私も大喜び。

食事の時も、田植えのことが話題になつて、家族みんなで、笑ったりして、楽しい食事になりました。また、私たち五年生みんな、田植えをしたいです。

農業科でがんばったこと

山都小学校 五年 田中 ひな

わたしたち五年生は、農業科で夏大根を育てました。

最初は、種をまいて水をあげました。

(はやく大きくならないかなあ)

という気持ちでした。

すこししてから、見に行ったら、草がたくさん生えてい

ました。わたしは、

(暑いのがなあ...)

と思いながらやりました。終わってみると

(やっと、できたー)

とい達成感がありました。

夏休みに入って、畑に行くとき草がいつぱい生えていました。それに、前の日雨が降っていたので、土がグジョグジョでした。でも、ちゃんとがんばりました。そのときの大根は、小さかったけれど葉っぱは、伸びていました。

二回目に行った時は、大根も前より大きくなっていました。三回目見に行ったら、葉が少し虫に食べられていました。それにあまり大きくなっていませんでした。

(どうしたのかなあ)

と思いました。ばあちゃんに聞いたたら、

「今年の夏は暑いし、雨が降らなかったからかな。」
と言っていました。

夏休みが終わって、十月初めに収かくしました。でも、小さい大根しかなく、家に持って行って切ったら黒いはんてんもようがついていて食べられなくなっていました。

とてもガツカリしました。

(あんなに、草むしりなどががんばったのに)

と心の中で思いました。

でも、がんばったんだからしょうがないと思いましたが、やっぱりくやしかったです。

来年は、どんな作物を育てるかわからないけれど、その作物はちゃんとできるようにしたいです。

初めての田植え

高郷小学校 五年 貝沼 佳恋

今日は、わたしにとっての初めての田植えです。わたしは、うれしくてうれしくてたまりませんでした。

「わたし初めて田植えやるんだあ。」

「うちの田んぼでは、もう田植えやったよ。」

など色々なことをしゃべりながら高郷小学校で育てている田んぼに行きました。着いたら武藤先生のお話を聞いてやりました。初めにわたしがなえを見た時は、(けっこう小さいなあ)と心の中で思いました。それでもうきうきして、はやくやりたくなりました。

「では、なえをうえてください。」

と先生が言いました。田んぼの中に入った時

「うわあーどろみたあい。」

「気持ちいいね。」

「ねとねとしているよ。」

と会話が進んでいきました。わたされた分のなえをうえ終わると

「もう一回やりたい。」

「まだまだたくさんあるからやるう。」

などと、どんどんうえていきました。うえ終わったら、

「いやあ、みなさんごくろうさま。」

と武藤先生が言ってくれました。その時はとてもうれしかっ

といつて終りました。（どんなふう成長するのかなあ）
 と思いました。今度そんなことを想像すると稲刈りがやり
 たくなりました。でも、少し心配もあるけど元気に育つて
 ほしいと思いました。

十月、みんなで植えた小さな苗が、立派に実っていました。一束一束ていねいに刈り取って、ひもで結び、大事な赤ちゃんをだっこするように稲束を運びました。しばらく干した後、武藤さんがお米を脱穀、精米してくれて、全校生で収穫感謝祭でいただきました。甘くて一粒一粒がとてもおいしいお米でした。

初めての米作り

高郷小学校 五年 齋藤 優佳

私は今年初めて米作りをしました。最初は（どうせ汚くなるだけだろうな……）と思っていました。支援員の方の説明を聞いてはだしで田んぼに入るとグニュツとして気持ちが悪かったです。でも、しばらくすると不思議なことに泥の感触が気持ちよくなりました。

社会科の時間に、米作りのことを勉強しました。米が出るまで八十八の手間がかかるから、米一粒には八十八の

神様がいますと先生が言っていました。

田植え後、一ヶ月ぐらいしてから、観察に行きました。すると、あの小さかった苗が大きくなっていました。夏の終わり頃、中ぼしをしました。私は中ぼしの意味を全然知らなくて、社会科の資料集で調べました。

中ぼしとは、田んぼの水を一度乾かして、地面にひびを入れ、土の中に空気を入れることだそうです。なぜそんなことをするんだらうと疑問に思っていたら、支援員の方が、「中ぼしをすると、稲に酸素がいくようになり、稲が丈夫に育つんですよ。」

と教えてくれました。

十月になり、稲穂が実つて稲刈りをする事になりました。かまの使い方が分からなくて不安でしたが、

「かまを外側に引くんじゃなくて、内側に引くんだよ。」と教えてもらいました。

しばらくして、友達と仕事を分担することにして、私は稲の束を結んでいきました。

作業をしている間も、お米を食べることが楽しみでした。

十一月、いよいよ収穫感謝祭の日が来ました。五月に植えた小さな稲が、おいしいご飯になりました。各学年で畑で作った野菜を使ってカレーも作り、全校生でおいしく食べました。

これからは農業科でお米や野菜をつくっていつか自分の力だけでお米や野菜を育ててみたいです。

里芋ができるまで

松山小学校 六年 猪瀬 愛未

私は里芋ができるまでいろんな先生方に植え方などを教えてもらいました。一年生の時からばあちゃん畑仕事を手つだつて、畑ならしなどはなれていました。でも、里芋は育てたことはなく、食べ物を育てるということは大変なことだと分かりました。学校で育ててむずかしかったのは里芋かもしれません。

植えつけからしゅうかくまで自分たちで観察し、里芋に害の無いようにしなければなりません。みんな協力してこそ、私たちは育ててこられたんだと思います。里芋が成長し、くきも根もがっしりになってくると、みんなうれしそうにしていました。自分たちで育ててきた里芋が、もう始めの時に比べたら五倍ぐらいの大きさになり、自分たちの農業についての気持ちをもっとふかめたと私は実感しています。私だったら将来もやりたいです。一年生からこの六年生まで育ててきたさつまいも、とうもろこしや大豆などの知識などを生かして、自分たちの将来へ生かしたいです。今年つくった里芋はふさくでしたが、おうちの人やお店などに並んでいる野菜などを作っている人たちの立場が分かりました。見た目では簡単そうに思うけれど、やってみれば草むしりや害虫の退治などいろんな問題もあるんです。自分が食べている野菜や果物も同じで、いろんな問題

がおきても作る人は手まひまかけて作っています。一つ一つの食べ物には作った人の愛情などがこめられていることがすぐく伝わりました。人は一人ではやっていけません。この里芋だって、六年生全員力をあわせて作ってきた里芋です。収かくしおわってから畑をならし、さいごまで後かたづけをしました。

大地の恵みって感じだと思います。育ててきた里芋もそうですが、やった所の畑にも感謝です。あきらめないことも大切だったけれど、最後はありがとうございましたと、畑にも教えてくれた先生にも言うことが一番いいと思います。

農業科の大切さ

上三宮小学校 六年 遠藤 美憂

私の家では、お米をたくさん作って、遠藤農園をやっています。だから稲刈りのシーズンは、家族全員大急がしています。そのために、少しでも早くになるように、私は手伝っています。手伝いと言っても、おちぼを拾ったり、小屋の中にこぼれている稲を拾ったりしています。

そして、家の稲刈りがはじまり少したつと、学校の稲刈りになりました。稲刈りの前のお父さんから、「あれ？明日稲刈りだっけ。行けないけどがんばって。」と言われました。

いよいよ学校の稲刈りがスタート！田んぼに行ってみると、そこにはしっかりと成長した稲が実っていました。私は、四月に種まきをした時、支援員さんが言っていた「一つの種から六百個の米ができる」ということが頭に浮んできました。その米を一つ一つ大切に自分たちの手で刈っていききました。やっと半分ぐらいまで刈ると、だんだんこしが痛くなってきました。でも、お父さんたちなんか機械で刈っているけれど、この経験をたくさんしているんだと思いました。稲刈りが終わると、あつという間だったなという気持ちと、つかれたという気持ちでした。稲刈りで刈った米を、何日かほしてだっこくをやりました。でも、天気の関係で二回ほど延期になってしまいました。いよいよだっこくの日私はなぜかだっこくがなつかしい気がしました。去年より機械が少なくなっていて、なかなか進みませんでした。やっと終わった！と思ったら、まだたくさんありました。残りは、けつきよく支援員さんたちがやってくれることになりました。

そして、収穫祭の日が来た！畑で作った野菜は豚汁に、自然の中で時間をかけて大切に育てたお米は、おにぎりにして食べました。とてもおいしかったです。

いつも、あたりまえに食べているお米や野菜はとても大切なものだと思います。これからは、お米に感謝し、作ってくれた人に感謝しながら大切に育て、大切に食べていきたいです。

田おこしの昔と今

入田付小学校 六年 佐藤 和佳

私は、農業科の学習を通して、農業の大変さと楽しさを知ることができました。特に、田おこし見学のことが印象に残っています。

農業支援員の若菜さんに、今は機械で行なっている田おこしの作業も、昔は三本ぐわという道具で、何日もかけて行っていたと聞いてすごくびっくりしました。そして、実際に三本ぐわで耕す作業を体験させてもらいました。お手本を見させていただいた時は、意外と簡単そうだなと思いました。実際にやってみると、とても重くて、難しい作業でした。上手に行うには、コツがありました。それは、足に力をいれて、土をひっくり返すようにやることです。昔の人は、この作業を何度も何度も繰り返してやっていたことを想像すると、私には絶対にできないすごいことだと思いました。一生けん命耕した田んぼで作った作物は、どこで売っている作物よりもおいしかっただろうと思いました。がんばって最後までやりとげるといことは、何をするとときも大切なことなんだな、と思いました。

次にトラクターの運転をさせていただきました。初体験だったので、上手にできるか不安でした。私は、順番が最後だったので、前にやっている友達の様子を見ていました。友達にはトラクターから降りると、口々に、

「楽しかった。」

と言っていたので、早くやってみたいなと思ったり、でも、上手にできるかなと考えたりしていました。そして、ついに私の番がきました。若菜さんに助手席に座っていただき、合図をしたら、ハンドルを左にグルグル回してと言われました。真つすぐの所は、曲がらないように前を見て進みました。若菜さんに、

「今までの中で一番うまいね。」
と言われてうれしかったです。

トラクターは、短い時間であつという間に広い面積を耕すことができ、便利だと思いました。そして、農業は、大変なことばかりでなく、楽しいこともあるんだなと思いました。

昔の人の苦勞と工夫

入田付小学校 六年 渡部 裕樹

ぼくは、今年の米作りを通して、昔の人の苦勞や工夫、農業の楽しさを学ぶことができました。

五月に田おこしをしました。三本ぐわという道具を使いました。支援員の方の説明の後、実際に使ってみました。すると、とても重くて、使いづらかったです。昔の人は、こんなに重いくわで、田んぼを全部耕していたんだなと思うと、そのたいへんさに気が遠くなりました。ぼくたちは、

本当に苦勞していないんだなと思いました。

その後、現在の田おこし機のトラクターを運転させていただきました。支援員の方に助手席に座っていただき、ハンドルを持つて運転してみると、簡単に楽しく耕すことができました。三本ぐわの苦勞がうそのようでした。農業の楽しさがわかりました。

十月に稲かりをしました。支援員の方に、
「下の所をみると、簡単にかれるよ。」

と教えていただき、実際にやってみると、本当に簡単にかることができました。

かつた稲の一部は、ぼくたちの手作業で行うだっこくのため、天日干しにしてみました。そして、稲かりの数週間後、だっこくをしました。使った道具は千歯こきです。去年は、足ぶみのだっこく機を使いました。足ぶみだっこく機は、足をふむと、だっこくするドラムのようなものが回り、そこに付いているたくさん突起に引っかかって、だっこくできましたが、ぼくは体が軽いので、稲の束を引っかけると、体がだっこく機の方に引き寄せられて、危ない思いをしました。千歯こきを見た時、本当にこんな機械できちんとだっこくできるのかなと思いました。足ぶみだっこく機のような危険はなくていいと思いました。千歯こきのギザギザの歯のところに、稲の束をかけて引っ張つてみると、思った以上に実がとれて、ぼくは、足ぶみだっこく機よりも使いやすいと思いました。昔の人たちは、頭がいいなと思いました。

新しい発見いっぱい　しいたけ栽培

関柴小学校　六年　葛岡　沙織

私は、最近までは、きのこがきらいでした。しかし、農業科の学習を通して、成長するきのこを見て好きになりました。

私たちの学校では、農業科の学習で、六年生はきのこ作りをすることになりました。きのこの中でも、しいたけを作ることになりました。

九月の中ごろ、児童会室にしいたけの菌床を設置しました。毎日観察して、表面がかわいたら、水をあげました。五日ぐらいすると、白い菌がだんだんきのこらしい形になってきました。白い絵の具でぬったようだった菌が、むくむくと成長してきのこの形になっていくのにびっくりし、かわいいなと思いました。

菌床を設置して一週間ぐらいした時に、めかきをしました。めかきは、大きくて形のよいきのこを作るために、一、二、三本いっしょに出てきたきのこのうち、小さいきのこをとる作業です。めかきでとったきのこを、家に持ち帰っていためて食べました。あんなに小さなきのこでも、ちゃんとしいたけの味がしました。

めかきをした次の日には、食べられるような大ききのこのこになっていました。あんなに小さいきのこが、一日で大きく成長したのは、おどろきました。二、三こしかあ

りませんでした。さつそく収穫し、家に持ち帰りました。母は、

「立派なきのこだね。おいしそう。」

と言つて、バターソテーしてくれました。しっかりとしいた菌ごたえで、とてもおいしかったです。

私は、売っている大きなしいたけしか知りませんでした。自分が育ててみて、小さかったきのこが毎日変化していく様子を見て、かわいらしく思いました。自分で育てたきのこを収穫した時の喜びはとても大きく、機会があればまた育ててみたいと思いました。

お米の大切さ

豊川小学校　六年　東條　萌々花

私は農業科で、只浦さんといっしょに米作りをして、いろいろな体験をしました。

田植えの時は、素足で田んぼに入りました。まず、すじひきでたてと横に線を引き、ますのようにしました。そこで私は、線が引いていないところにうえるのかと思った。線の交わったところに植えるそうです。そして、植えおわったら、いっばい田んぼをふみました。只浦さんによると、ふむことで、土をかきまぜて酸素を送りこむというのです。酸素を送りこむと、稲が元気になるので、そういう方法があったのかと思いました。

ちよつと成長したころ、消毒をしました。私たちのお米は無農薬なので、農薬はまきません。そのかわりに、イオン水と、木酢液と炭の粉をまぜたものをまきました。少し、木酢液が臭ったけれど、いい稲になるのならと思い、一生けん命にまきました。

夏になって草たちがのびてきたころ、草とりをしました。田んぼの中の草をとるためには、ころばしという道具をつかいました。その使い方は前に押したらその分、後ろにひきます。それをくりかえして進みます。結構重くてたいへんだったけど、なれば簡単でした。

稲がこがね色になると、稲刈りをしました。かまで一束ずつ刈っていききました。その時の注意は、かまをもっていない方の親指は上にむけることです。それに注意して刈っていき、ひもでたばねて干しました。干し方はさでがけと棒がけと三ば立てです。こんな干し方があるんだと思いました。

みんなで試食をしました。無農薬で自分たちで作ったお米はやわらかくてほんのり甘かったです。これからはお米とお米を大切にしておいしく味わっていききたいです。

野菜ってすごい！

熱塩小学校 六年 鈴木 莉乃

「野菜ってすごい！」私は、そう思いました。そう思ったものが初めての農業科、三年生のころでした。どんどん、農業科を、やっていくうちに、「つかれた」「やめたい。」と思うときもありました。しかし、農業科は、私にとつて楽しさを見つける旅でもありました。その農業科の中で学んだことが二つあります。

一つ目は、「野菜の命」「稲の命」をいただいているということです。私は初め、

「野菜や稲に命なんてあるのかな、しかも野菜や稲の命をいただいているの。」

どういう意味だかわかりませんでした。だけど、野菜などの食べ物がないと生きていけません。「米、野菜の命をいただいている。」とは、こういう意味だとわかったとき、野菜や米にありがとうと言っていました。

二つ目は、「米は人が作るんじゃない、稲が作るんだ。」です。たしかに、稲は育ちますが、稲が作ると言われたとき、正直、びっくりしました。田植えや、肥料まきまで、私たちがやっていたからです。でも、私たち人間が野菜や稲を作ることはできません。いくら科学が発達していても、科学の力で、米や野菜がしてくれるはずは、ありません。私たちは、稲・野菜を育てています。もつと、簡単に言えば、

野菜・稲が育つのを手伝っているのです。その話を聞いた
ら、野菜・稲を育てる手伝いがとても、おもしろくなっ
てきました。

私は、野菜の力に、とてもおどろきました。野菜は、私
を元気にしてくれる食べ物です。これからも、野菜を大切
に育てていきたいです。

農業科の思い出

姥堂小学校 六年 管家 拓巳

「どうせ今回も枯れてだめなんだろうなあ。」

四月の農業科はそんな気分が始まりました。

ぼくはこれまで学校でいろんな作物を育てたけれど、今
まで一度も納得のいく収穫はできませんでした。

春から夏、秋も終わって冬、支援員の皆さんにお礼をす
る「感謝の会」の日がきました。そこで作った芋煮の中に、
ぼくの大根が入っていました。

今まで一度も野菜をまともに育てられなかったぼくが、
大きな大根を作ることができたのには次のような理由があ
ります。

二期の初めにやった大根と白菜の種まき。ぼくは毎年
のように、「どうせ立派にならないよ。」と思いながら種を
まきました。

それから一ヶ月、苗の植えかえの日が来ました。苗のな

い人は二本以上ある人からもうとうとうことだったので、
ぼくは誰からもらおうかなと考えていたところでした。

だらだらしながら苗を見にいくと、そこには元気な苗が
四本ありました。びっくりしたけれど今回は苗を枯らさず
に、他の人にあげられるくらいできたのが嬉しかったです。
そして植えかえた時に、先生に上手と言われてますます
うれしくなりました。

それから枯れずに元気に育って十二月、やる気のなかっ
たぼくが、立派な大根を育てられるようになりました。

ぼくは農業科を通して、作物の大切さだけでなく、最後
まであきらめないことを学びました。

だからこれからは、あの大根に恥じないように、どんな
ことも最後まであきらめないようにしたいです。

ジャガイモを育てて

山都小学校 六年 菊地 歩美

私は、六年生になって初めて、種イモを見た。今思うと、
種イモから出ていた芽は、その種イモの起きようとする意
思の表れだったのかもしれない。

それから、私はがんばって世話をした。草をむいたり、
水をあげたり。だが、すぐつかれてしまった。

長雨で収かくがくれたジャガイモを収かくに行った日。
見ると、地表にころがっている物も、茎がくさっている物

もあって、汚い・・・さわりたくない・・・もうダメなんじゃないか、そう思った。でも、ジャガイモは無事だった。ところどころいたんでいた物もあったが、たいはんは収かくできた。しばらくして、たくさんとれたジャガイモとマルチを、一輪車に入れて学校に戻った。ジャガイモがぬれていたから、西げんかんに置いて、かわかしておいた。

しばらくたつと、収かくしたジャガイモで、調理実習をすることになった。メニューは、ポテトチップス、ポテトサラダ、ジャガイモドーナツだ。私は、みんなががんばって育てたジャガイモで調理実習かあ・・・、おいしいだろうなと思った。

十一月二十二日、ジャガイモの調理をした。私たちは、ジャガイモドーナツをつくった。給食の時間に、みんなで作った物を食べた。どれもこれも、おいしかった。つくるものを手伝って下さった食改のみなさんも、おいしいと言ってくれた。

私は、ジャガイモを収かくする時、汚いと思ってしまった。そのことを後かいている。次は、この経験を生かして、生き物の命を大切にしたいと思う。

講 評

三・四年生の作品から

① 三年生にとつて、数か月にわたる作物の成長の様子をまとめて書くことはなかなか難しいことです。それを克服するためには、観察をこまめに行い、記録をとるということが大切です。子どもたちの作文の中にはその記録を生かしたまとまりのある三年生らしい作文がたくさん見られました。

② 「大豆の種が赤くなっていること」や「ジャガイモは種いもから育てること」「土寄せをして作物が倒れないようにしていること」などに対して、子どもたちは新鮮な驚きを感じています。この新鮮な驚きが子どもたちの感性に磨きをかけ、豊かな表現に結びついていることを強く感じました。

③ 中学年の子どもなりに、自分たちで育てた作物を通して、日常の食事を考えたり、その食事を支えている作物を一生懸命に育てている人々のことを考えたりしています。中学年の子どもたちの中にも「食と農」に対する意識が芽生えていることがうかがえます。

④ 「あの小さな種がどうしてこんなに大きな実になるんだろう。」という素朴な疑問や、「にょいんの強いあの牛糞が作物をこんなに大きくしてくれるんだ」という驚き、「夏の暑さのために小豆がいつもの半分しか取れなかった。畑がかわいそう。」という優しい気持ちな

どから、小学校農業科の学習を通して子どもたちの中に、探究心や思考力、感性が確実に育っていることが感じられました。

⑤ 子どもたちは猛暑のために作物が十分に成長せず「花が少ないなあ」と話す支援員さんの言葉を聞き逃さなかったり、小学校農業科に関わる多くの人々が笑顔を見せることから「農業が『笑顔』を生む」と感じ取ったりしています。一見子どもたちは何も考えずに小学校農業科の学習を取り組んでいるように見えますが、実は様々なことを感じたり考えたりしていることがよく分かります。

⑥ 夏の猛暑や秋の長雨のために様々な失敗や苦労があつたにもかかわらず、くじけることなく次の年も新たな挑戦をしようとしたり、しっかりと活動する上級生の姿を見て自分もそれを手本に上級生になったらそのようになりたいと考えたりするなど、子どもたちの心の成長が強く感じられました。

五・六年生の作品から

① 猛暑のために作物が思うように成長しなかったことから、作物の成長と天候の関係を強く意識したり、作物が実る頃になるとスズメやカラスがやって来ることを鋭く感じとったりするなど、高学年らしい作物の成長と自然との関わりに目を向けた作品が多く見られました。

② 昨年よりも自宅での作物栽培に興味をもったり、実際に自分で作物を栽培したりする子どもたちが見られるようになりました。小学校農業科の学習を通して、喜多方市の基幹産業である農業に対して高学年の子どもたちの目が向けられるようになってきている様子があるがえす。

③ 田圃でのイネの成長とバケツ栽培でのイネの成長とを比較したり、小学校農業科副読本でイネの成長を確認したりするなど、中学年には見られなかった高学年らしい観察の仕方が見られました。これも、先生方の意図的、計画的な指導のおかげだと感謝しています。

④ 「ちよつとした作物の手入れの違いや天候の変化によって作物のできればえが変わってしまう。」あるいは「芽が出るのは新しい生命が生まれることだ。」などというように、六年生らしいものの見方や感じ方が育っていることが感じられました。

⑤ 小学校農業科が単なる作物栽培を体験する学習ではなく、人間と自然との関わりや地域と子どもたちとの関わりなど、たくさんのかんことを学ぶことのできる学習であることが分かります。特に農家の人々の苦勞を理解することや地域の人々への感謝の心をもつなど、現代の子どもたちにとってはなかなか経験できない貴重な体験をしていることが分かります。

⑥ 毎年栽培する作物を変えることによって、子どもたちは新しいことをたくさん学んでいます。また、作物

を栽培する経験を積み重ねるごとに、農業の難しさや自然の恵みの大きさを実感しています。高学年では、このように先生方の意図的な指導が大きく実を結んでいることを実感しました。

全体を通して

① 先生方が学年の発達段階を考慮しながら、その学年の子どもたちが栽培するのにふさわしい作物を選定し、成長の様子をじっくりと計画的に観察させている様子が強く感じられました。小学校農業科は単に作物を栽培するだけの学習ではなく、それらのことを通して様々なことを子どもたちに感じ取らせたり考えさせたりするということが日々実践されていることを強く感じました。

② 子どもたちは支援員さんたちの話を実にしっかりと記憶しています。そしてそのことが、支援員さんたちが話す農業に隠された知恵や作物の不思議さなどに対する鋭い感覚を育て、農業や農業と自然との関わり、農業と環境との関わりなどに対する理解を深めることに役立っていることを感じました。

③ 小学校農業科の学習を学校生活の一部に取り入れるなど、工夫した取り組みが見られました。たとえば、朝のマラソンの後畑に行きミニトマトを収穫し、それを食べた時のそのおいしさは格別だったとある子どもは書いています。そんな文章を読むと本当に子どもた

ちの会話が聞こえてきそうです。そういう取り組みがあつてこそ、作物の大切さ、おいしさを子どもたちは感じ、農業の大切さを実感しているように思います。

- ④ 小学校農業科副読本を作成する際に、農業用語をどのように表記するかということが問題になりましたが、意図的に農業用語をそのまま使用することにしました。(経緯については、解説書をご覧ください。)しかし、子どもたちは農家の人と同じように、「畝たて」「間びき」「芽かき」などの言葉を当たり前のように使っています。そんな文章を見るたびに、できるだけ本物の農業を体験させたいというねらいが達成されつつあることを感じました。

- ⑤ 学級のほとんどの子どもが同じ題材でしかも同じ文章構成で書いてあるケースが見られました。作文の書けない子どもへの指導としては適切だと思いますが、小学校農業科の学習を通して一人一人の子どもが考えたり感じたりしたことを生かせるような指導も大切にしたいと思っています。

- ⑥ 最終審査会で「種を植える」と言葉の使い方が話題となりました。正確には「種をまく」です。また、田圃でころばしを使った除草を「草をとる」ではなく「草を刈る」と表現している子どもも見られました。このように「まく」と「植える」あるいは「刈る」と「とる」を正しく使えるようになって欲しいと思います。

す。(校正ですべて正しい表現に訂正してあります。) 応募作品の分析から

応募のあった作品九百三十八点について、どのようなことが書かれているか分析してみました。

- ・ 農作業について書いている 90%
- ・ 作物の栽培には苦勞が多いことについて書いている 53%
- ・ 友達との協力について書いている 48%
- ・ 農業科支援員さんに世話になっていることについて書いている 40%
- ・ 育てた作物がおいしかったことについて書いている 39%
- ・ 農業に隠された知恵について書いている 35%
- ・ 栽培して楽しかったことについて書いている 32%
- ・ 作物の不思議さに対する驚きについて書いている 27%
- ・ 来年への挑戦について書いている 24%
- ・ 作物の成長への感動について書いている 20%
- ・ 田圃や畑の生き物について書いている 16%
- ・ 家族の農業に取り組む様子について書いている 15%
- ・ 農業の難しさを実感したことについて書いている 12%
- ・ あきらめないで頑張ったことについて書いている 11%
- ・ 天候によって作物の成長が左右されることについて書いている 11%

いている

10%

このほかに高学年になると「農業の大切さ（意義）」や「自分たちの取り組みの反省」、「作物には生命があること」などについて書かれた作品が多く見られるようになりました。

今回の作品集では先生方の指導に役立てていただくため、巻末に講評を掲載しました。なお、この講評はこの作品集に掲載できなかった作品を含め、応募のあった九百八十三点すべてをもとにして作成しました。

平成22年度（第2回）喜多方市小学校農業科作文コンクール

【最終審査会審査委員】

福島県会津農林事務所喜多方農業普及所	
経営支援課長	長谷川 一朗
J A会津いいで営農部長	富山 裕治
喜多方市PTA連絡協議会会長	葛岡 道男
喜多方市立関柴小学校長	松本 敬之
喜多方市小学校農業科支援員	
・喜多方市小学校農業科委員会委員	山田 義人
喜多方市教育委員会学校課長補佐	
(小学校農業科担当)・指導主事	渡部 裕

編集後記

昨年11月に行われた支援員のみなさんの交流会で、何人かの支援員さんから「果たしてどれだけ自分たちのしていることが子どもたちの役に立っているのか」という声をお聞きしました。その場で「けっしてそんなことはありません。」と否定しましたが、私たちの言葉よりも小学校農業科を学ぶ子どもたちの作文がそのことを証明してくれています。

このコンクールに応募した子どもたちの作品には、必ずと言っていいほど支援員さんが登場します。支援員さんの農業や作物についてのお話に真剣に耳を傾ける子どもたちの姿や、支援員さんが子どもたちに一つ一つていねいに作業の仕方を教えてくださっている姿、支援員さんにほめられ満面の笑みを浮かべる子どもたちの姿等、様々な様子が目に浮かびます。

小学校農業科では、支援員さんや地域の皆様お一人お一人が、子どもたちにとって大切な先生であり、頼りになる存在です。そして、そのことを通して子どもたちは自分の住む地域やふるさと喜多方を意識するようになっていきます。このように、小学校農業科においては、支援員や地域のみなさんは重要な位置を占めています。

来年度もまた、支援員の皆様はじめ地域の多くの方々にお世話になると思います。この作品集がそんなご苦勞をおかけする皆様方の活動の源となることを強く願っています。

平成22年度 喜多方市小学校農業科作文コンクール作品集

平成23年 2 月 発行

発行者 喜多方市教育委員会

印刷所 有限会社 五十嵐印刷

